生徒会の雑務

炎の妖精

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

美少女だけの生徒会と思った？残念、既に男子が一人いました。その男子は杉崎よりも早くフラグを乱立させていたようで……雑務という肩書で今日もマイペースに生徒会で本を読んでいたり、義妹とゲームしたり、ボーイッシュ副会長とボードゲームとかしたり、ひとつ上のドＳ先輩に弄られたり弄り返したり、ロリ会長さんをフォローしたり、しなかったり、自称ハーレムの主の希望を打ち砕いたり……個性的な学生が集う碧陽学園の生徒会で、比較的まともな部類に入るその男子は……

目次

お仕事しないで駄弁る生徒会1 ― 1
お仕事しないで駄弁る生徒会2 ― 30
お仕事しないで駄弁る生徒会3 ― 57
お仕事しないで駄弁る生徒会【裏】 79
しなくてもいいのにラジオ放送しちゃう生徒会1 ― 107
しなくてもいいのにラジオ放送しちゃう生徒会2 ― 133

お仕事しないで駄弁る生徒会1

「世の中がつまらないんじゃないの。貴方がつまらない人間になったのよっ！」

正面のとても先輩とは思えない幼児体型をした先輩がそんなことを偉そうに言ってのけた。

この発言だけを取ってみたら、第三者は何事かと思うだろうが俺からしたらいつものことである。この同年代よりも発育が一回りよろしくない先輩こと桜野くりむ先輩はこの碧陽学園の生徒会長である。

俺の一学年上の先輩で、生徒会長なのである。小学生にしか見えない体型にその言動、行動。全てが見た目とリンクしてるかのように幼いが、生徒会長なのである。

今の発言も何かの本の受け売りであって、物事にすぐ影響されてしまう人なのだが生徒会長なのである。

大事なことなので生徒会長を強調しました。

「ちょっと聞いてるの!?」

そんな近所の小学生にも同じ小学生と間違われてしまう（会長先輩親友談）会長先輩だが、ここの生徒会長に選ばれるくらいには人気がある。主にマスコット的な意味でだ

が。

そうそう。ここ碧陽学園での生徒会役員選抜は他とは違うシステムであり、学生による人気投票で決まる。しかも時期が入学式の前か後だったか忘れたが……かなり早い段階で行うのでほぼルックス重視の人気投票だ。

でもって、イケメンよりもかわいい女子とかに票が集まりやすく……歴代から碧陽学園の生徒会メンツは美少女で構成されてることがほとんどだ。かわいいは正義って言うしな。

まぁ、例外もあって人気投票とは別のシステムもあったりするんだが……それは追々だな。ていうか、原作読め。

「……すぎさきぃ」

「お、おいそろそろ会長を相手してやれって。会長泣く一歩手前だぞ！」

俺が軽くテンプレな説明を読者たちにしていたら、俺から見て斜め左。会長先輩から見て右隣の席に座ってる。二枚目風味の男子学生。

彼の名前は杉崎鍵。一応俺と同じクラスメイトで、俺含め男の生徒会役員である。奴は副会長。俺は雑務。

……望んでここに入ったわけではないとはいえ、この差はなんよ。こんなんだったら俺別にいらないよね？役職で雑務なんて言われるもんだから、他の生徒たちからも俺の

立ち位置は雑務をやらされる下っ端みたいな感じになっちゃってるもんだし……はぁ、こんなツラは良くても性格は難有り。てか逆に良い所を見つける方がハードモードな年中発情下半身男の杉崎より下の俺ってなんなんだろうなー

「聞こえてるから!!めっちゃ声に出てるからっ!!俺ってそんな風に見られてたの!?」

「どうやら自覚がないらしい。まぁ良くある自分は普通だと言い張る人が、変人であるというやつと同じようなものだろう。彼は自分が常人よりも性欲がコントロールできず万年テントを張っている歩く公然猥褻物だということは周知の事実だというのに」

「だから声に出てるっての!!何!?俺お前になんか嫌われるようなことでもした!?」

おっと、今までのことは全て口に出していたらしい。会長先輩共々涙目になっているが、杉崎は放置でいいだろう。

だってヤローだし。杉崎の扱いが雑なのは今に始まったことではないし。

「で、なんでしたっけ。杉崎が童貞の不能野郎って話の続きでしたっけ?」

「違うわよっ!!昔は良かったなぁって話を……って、杉崎はどうして胸を抑えてるの?」

「い、いえ……男からの言葉とはいえ今のはすっげークるものがありまして……」

「否定しない辺り事実と見受けた」

「不能じゃないやい!!俺の相棒はいつでも美少女に向けれるビッグマグナムなんだい!!!」

「おう、その爪楊枝の自慢はせんでいいから」
「そんなに短くも細くもねぇよ!?」
「で、童貞なん？」
「ど、ど、ど、ど、童貞ちゃうわ！」
「わっかりやすい反応だな～」
「……アンタたちいつまでそんな会話してるのよっ!!」
いつものように杉崎を弄ってると会長先輩が顔を真っ赤にして机を叩いていた。
本人からしたら力いっぱい叩いてるかもしれんが、そこまで音してないし、涙目でんなことされてもまったく怖くもなんともない。
「杉崎もだけど、四季ももう少し生徒会役員の自覚を……」
「いや、お言葉ですけど雑務にどうやる気を見いだせって言うんですか。しかも俺入りたくて入ったわけでもねーですし」
「そ、それは……」
嘆息交えて言い放つと、会長先輩の視線が左右に泳ぐ。
そう。俺はさっき話した人気投票で入ったわけでもなく、自分の意志で生徒会に加入したわけでもない。
つーか、誰が好き好んで雑務なんて職に就くと思うだろうか。

「なら今すぐにでも辞めてもいいんだぞ!!そうすればここは俺だけの楽園ハーレムに!」
「お、復活した」
「だから、生徒会は杉崎のハーレムじゃないから！私のお城よ！」
いやそれも違うけどな。
杉崎のハーレム発言についてはこれもいつものことである。俺と杉崎を除けば生徒会メンツは全員美少女だ。もちろん、俺らと違って人気投票で選ばれている。
なので、杉崎は会長先輩含めて４人の美少女を俺の嫁だのハーレムだの大好きだとうんたらかんたらと常日頃から言いまくっている。
……言っておくが、４人ってのは俺は入ってないからな？俺は俗にいう男の娘でもねーからな！１００人中１００人全員が男だと認識できる男だからな！
「さぁ、会長！優(すぐる)のやつは放って置いて、俺との愛の絆を深めましょう!!」
「深めないよ!!私と杉崎はそんな仲じゃないでしょう!?」
「じゃあ、会長好きです。超好きです。超付き合ってください」
「じゃあって何!?なんで杉崎はそんな軽薄に告白できるのよ?!」
「超と言えばあの窒素ちゃん良いよな。ロリは恋愛対象外だが嫌いじゃない」
「四季も四季で何を言ってるの!?そしてどうして私を見ながら言うのよ!!」

今日は会長先輩が弄られまくる日みたいだな。ますますヒートアップしていく会長先輩を杉崎に任せ、そろそろ俺の自己紹介でもしようか。すっかり忘れてたわ。

俺の名前は四季優。苗字はともかく、名前の方は一発で読むのは難しいだろう。ゆうではなくすぐると読む。

この碧陽学園の２年生で生徒会役員（雑務）である。家族構成は母のみ。いわゆる母子家庭ってやつだな。

趣味は……ゲームとかスポーツとかかねぇ？まぁ、色々やる方だとは思う。後バイトも週２，３のシフトで組んでいる。何をやってるかは……まぁ、そのうちな。

この二人との関係性は会長先輩とは先輩後輩だなー。端から見たら俺の方が先輩に見られてもおかしくないけど、俺が後輩だ。会長先輩とは去年ぐらいからの付き合いかね。その頃はまだ俺は生徒会に入ってはいなかったけどな。

で、杉崎とは今年から知り合った。去年はクラスが違ったが、今年は同じクラスで同じ生徒会役員。

今じゃこいつの言動に慣れてしまってきてるが、初めて出会った時はビックリしたわ。現実でハーレム目指してるやつがいるなんてよ。

「皆好きです。超好きです。皆付き合って。絶対幸せにしてやるから」
そうそう。こんな台詞だったな。ココで他4人に言い放ったんだっけ。
あの時は俺もいたが、杉崎は俺がいるってことを予想していなかったようで親の敵を見るかのように敵意むき出していたよな。
まぁ、男が自分一人だと思ってたら実はもう一人男がいましたーだもんな。気持ちはわからんでもないが、一々突っかかってこんでほしい。
そんなこんなで杉崎との仲は良くもなければ悪くもない……って感じかね。生徒会メンバーが関わってこなければ、基本良いやつではあるからな。
「そうよ!あの時点でこの生徒会に貴方のいいかげんさは知れ渡ってるのよ!誰でもいいから付き合えって堂々という人間に誰がなびくっていうの!」
「失礼な。誰でも良くはありません。涼宮ハ〇ヒ風に言えば美少女以外に興味ありません」
「男の娘は?」
「男はノーサンキュー!!……と言いたいとこだけど、かわいければよし!」
読者の皆様。こいつのこの発言をよーく覚えておいてください。原作見てる方はわかるだろうけど、後のフラグになりますので。
「かわいいなら誰でもいいってことでしょうがっ!狙うなら異性だけにしておきなさい

！あとやるならせめて富士見ファンタジア文庫的なたとえか、ハーメルン的なたとえで行きなさい！」
「いや、ハーメルンはダメでしょう……」
「一途なんです！美少女に！」
「括りが大きいわ！」
「普段からハーレムだの言ってるやつが一途なんて言っても説得力ねーな」
「希少種ですよ、美少女」
「そういう問題じゃない！複数の人間に告白してる時点で誠実じゃないのよ！」
「ええー、ふらふらしている主人公より良くないですか？最初からこう、バン！と俺はハーレムルートを狙う！と宣言している方が潔いでしょう？」
「残念ながら杉崎はギャルゲのモテモテ主人公とは違うわ！」
「そもそも、ギャルゲの主人公はまずハーレムを狙わんだろ。お前の発言はむしろ、主人公を引き立てるサブキャラって立ち位置じゃねーの？」
「いや！最近の主人公は恋をしようと積極的なんだ！俺の女の子に対する想いは本気なんだ!!」
「女の子というより美少女。だろ？お前と主人公の決定的な差は単数か複数かってことだ」

「そうよ！杉崎は言うなれば主人公の軽い親友タイプよ！リアクションが良い類のギャグ要員よ！」

便座カバー!!……杉崎と俺はともかく、この会話についてこられる会長先輩ってどうなんだ。

「ば、ばかな……俺が主人公でなければ誰が生徒会ヒロインたちを攻略するんだ……!?」

「私達を勝手にヒロインにしない！それに杉崎よりかは四季が主人公の方が遥かに良いわよ!!」

「え、なんスか。それ遠回しの告白かなんかですか会長先輩」

今までの会話の流れからしてそうとも取れる発言だよな今の。

あ、そうそう。俺の桜野くりむ先輩の呼び方についでが、俺は基本年上は名前で呼ばないスタンスなので、先輩とかの言葉で一括りにして呼んだり、苗字で呼んでいる。会長に関しては桜野先輩と呼ぶのもなんかしっくりこなかったので、会長先輩と呼んでいる。

一部には不評だったりする俺のスタンスだが、大半の人は文句とか言わんので呼び方を変えることはそうそうないだろう。

「ち、ち、ち違うわよっ！今のは言葉の綾というか、杉崎と比べたらまだ四季の方が良

いって……だけであって……べ、別に告白なんかじゃ……」

顔を真っ赤にし、顔を俯かせごにょごにょと呟く会長先輩。

……冗談で言ったつもりだったのだが、今の会長先輩をかわいいと思ってしまった自分がいる。

口元に手を当てて、こっちの反応を真っ赤な顔でチラチラと様子を見てくる様は見ていて愛らしい。

俺にロリ趣味はないが、会長先輩って一応年上なんだよなー。こういう恋愛関係の話題にめっぽう弱い会長先輩だけど、ちゃんと意識している辺り、そこら辺の小学生とは違うってのを再認識する。

ま、さっきの発言も突然の事で、思ったことをそのまま言っちまったんだろうな。会長先輩には良くあることだ。

……で、だ。

「ぐぎぎぎぎぎぎぎ……!!」

机に握りこぶしを置いて、こっちを血の涙を流さんとばかりに睨んでくるバカ杉崎がいる。

仮にお前が主人公だとしたら、とても主人公がしていい顔じゃないぞ。

このままにらみつけられて防御力を下げられるのも嫌だったので、さっき会長が杉崎の好きです発言されて、紙パックのジュースを握った時に噴出され、拭きとって丸めたティッシュが俺の横に落ちていたのでそれを拾って、部屋の隅にあるゴミ箱にポーイ。

一度シュートを外した会長先輩とは違い俺が放ったシュートは離れたゴミ箱にも華麗に決まった。

ゴミはきちんとゴミ箱に!!

「……四季ってさ、なんだかんだ言っても優しい……よね。文句を言いつつも生徒会にだって入ってくれたし…さ」

「え?なんか言いました?よく聞こえなかったんですけど」

四季って名前は聞こえたので、俺に向けて会長先輩が喋ったのはわかったんだが定位置の席に戻るときにイスを引いた音のせいで、その後の事は聞こえんかった。

もう一度おにゃーしゃすと頼もうとしたが……

「な、なんでもないによっ!」

聞く前に話を打ち切られてしまった。どうやら、盛大に舌を噛んでしまったようで涙目で口を抑えていた。

……なんつーか、見ていて飽きないよなこのロリ先輩は。

「なんでだあああああああああああああ!!主人公は俺じゃないのおおおおおっ!?」

杉崎は杉崎で理解不能なことを頭抱えて、天井に向かって叫んでいた。意味わからん。

「キーくんの叫び声が廊下まで聞こえたんだけど……どうかしたの？」

なーんていつも通りしょーもない会話をしていると、俺の背後から……透き通るような声が響き渡った。

どうやら、杉崎の自称ハーレムの一人がやってきたようだ。

「なんてことはないですよ。いつもの発作とやらです」

後ろを振り向くと会長先輩とは正反対の長身＆スタイルの大人の雰囲気を醸し出している女性が立っていた。

彼女は紅葉知弦。詳しいことは原作参照。

……手抜きすぎるって？どうせＳＳ見てる人は原作とかアニメとか見てるし大丈夫だって。

「そう」

特に気にすることもなく、先輩は杉崎の正面である定位置の席に座った。
……発作で伝わるのか。こんな短期間で杉崎のキャラは生徒会内で確立してるってことだよな。
「知弦さん!!」
さっきまで頭を抱えていたというのに、急に顔を上げ先輩の方に身を乗り出す杉崎。
その唐突な行動に会長先輩ははひゃうっと声を上げ驚いていた。
「何かしら?」
「俺と優……どっちが主人公に向いてますか!?」
「お前はまだんなことを気にしてんのか……」
正直、主人公ってやつは自分のことを主人公だと思わないもんだと思うがな。
だって、ル○ィとか悟○が俺は主人公だ――!だとか言わんだろ。言ってほしくもないが。
先輩はテーブルにノートやらお菓子などを鞄から取り出しつつ、こちらにどういうこと?と顔を向けてくる。
「あぁ、なんかこいつ自分がギャルゲーのモテモテで出来る主人公じゃなくて、主人公の悪友的なポジションのギャグ要員キャラだってことを会長に言われて納得出来ないみたいですよ」

「なんか言葉に悪意を感じるんだが……というわけです！知弦さんはどうおｍ」
「ユー君」
　バッサリだー！ニコッと満面の笑みを浮かべて杉崎に告げた！普段だったら、先輩の笑顔に見惚れてたかもしれない杉崎だが、言い終える前に言われ、即答されるというダブルコンボに呆気無く撃沈した！
　灰と化した杉崎を見て、さっきの笑みとは別のベクトルの笑みを浮かべる先輩だった。
　そんな自分の親友である先輩を見て会長先輩は引きつった笑みを浮かべていた……相変わらずこの人はＳ気質だよな……
　あぁ、それと紅葉知弦先輩は杉崎の事をキーと呼ぶように俺を呼ぶ時もあだ名で呼んでいる。
　優すぐるは音読みでゆうって読むしな。それから取ってるんだろう。
「バッサリ斬りましたねー先輩」
「ギャルゲーが具体的にどういうものかは知らないけど、普段の行動を見てたらユー君の方が断然主人公っぽいもの。キー君には悪いけど、比較するまでもないわ」
「もうやめて知弦！杉崎のライフは０よ!!」
　傷口に刀を刺してエグルレベルの追い打ちをスラスラと言って退ける先輩は超弩級

のSであろう。
さすがに見ていられないと感じた会長先輩が某カードゲームで有名な台詞を言った。
何勘違いしてんだ？残念ながら、先輩のターンはまだ終了してないぜ。
「それよりもユー君。いつになったらその呼び方をやめるの？」
「うぇ……？」
先輩の矛先はこちらに向いた。
アカン。あの獲物を見つけた様な目……あの目をしてる先輩は……危険だ。
「もう私達が知り合ってから数年は経つのよ？それなのに、口調も堅苦しいまま」
「いや、だって先輩だし……最低限の礼儀は払わないといけないなーと思って」
「なら口調は百歩譲って良いとしましょう。いずれちょ――――教育を施して上げる予定だし」
ちょっと待て、アンタ今調教って言おうとしたでしょ。言い直してもわかるわ!!
「呼び方って言われましてもねぇ……先輩は先輩っしょ？」
「学生の間は……ね。でもね、ユー君。私たちはいつまでも学生ではいられないでしょ？」
「まぁ、そうッスけど……」
「ほら、ユー君が好きなアニメでも言うじゃない。名前を呼べば友達だって」

「いや、アレは同性間で適用されるものであって、異性じゃまた別の話……」
「キー君は私を名前で呼んでるわよ？」
「はーっはっはっは!!優！お前に知弦さんを名前で呼ぶ度胸はないだろう!?なぜなら、俺は主人公！そしてお前は俺の友人ポジションだからだ!!」
　イスの上に立ってこっちを見下ろして言ってくる自称主人公兼ハーレムの主にイラっときたが、良くあるＳＳ物での転生者が他の人にモブだとか言うじゃん？アレを俺に言わなかっただけまだ許せた。
「杉崎は杉崎。俺は俺ですよー。俺基本年上の女性は馴れ馴れしく名前で呼ばないことにしてるんで」
　そう、さっきも言ったかもしれんが俺のスタンス云々で不評だって言った一部の人は先輩だ。
　中学時代から言ってたことなのに、先輩はこの呼び方にご不満があるご様子。
「いい？杉崎。アンタも四季を見習ってもうちょっと節操を……」
「だが断る！俺は自分を曲げない!!欲望に忠実でありたいんだあああああああ!!」
　俺も自分を曲げたくはない。曲げたくはないんだけど……
「はい、ユー君。私の名前は？」
　……Ｓモードのスイッチが入った知弦さんを俺一人で相手するのは辛いです……

「……紅葉知弦さんです」
「はい。正解。ご褒美にあーんしてあげる」
イスをこっちに寄せて近くにまで来て、自身で持ち込んできたスナック菓子を一摘みし俺の口に入れようとする。
……ホントSモードのこの人は活き活きしてるな。俺を辱めるのがそんなに楽しいか!!
「ぐぬぬぬぬぬ……!優の奴、ハーレムの主である俺を差し置いて……知弦さんからあーんだとぉ!?」
「だから、生徒会は杉崎のハーレムじゃないって……」
「会長!俺にしてくださいっ!あーーんっ!!」
「……えいっ」
「ふがっ!……か、会長!正確に狙えないのなら指で弾いたりしないでくださいよ!!」
食いもんで遊ぶんじゃありません。
……と、会長に叱ってやりたかったが今はそんなことはどうでもいい。重要じゃない。
ここで先輩のあーんを断ったら、今までの経験上これ以上にめんどくさいことになるのは目に見えている。ここは素直に口を開けておく。

「どう、美味しい？」
「……うす塩の味がします」
「そりゃうす塩だもの」
　先輩の手が口に触れないように、こちらでなんとか顔の位置を調整させポテチだけを食すことはできた。満足そうにする先輩に対し、俺は頬が熱くなるのを感じた。
　……なんの抵抗もなく、あーんをしてしまったのだが付き合ってもないというのに異性に……しかも先輩にしてもらうなんて。これだったら素直に先輩のことを名前で呼んだほうが良かったわな。
「よし、それじゃあユー君。私のことを呼んでみて？」
　ここで名前で呼んでくれと言わない辺り、先輩らしいなと思いつつ。
「先輩」
「……」
　だが俺は自分を曲げないっ！付き合ってもいない女子を下の名前で呼ぶのは俺のポリシーに反する！
　先輩の周囲の温度が下がったような気がするが気のせいだろう。
　杉崎と会長先輩がお互いに顔を見合わせて震えているのも気のせいだろう。きっと部屋が寒いだけだろう。

……そうに違いない！ていうかそうであってください……

「……ま、こればっかりは無理強いしてもしょうがないか」

よ、良かった。なんとか妥協してもらったみたいだ。ちょっと不服そうにはしていたが、自分の席に戻っていった。

杉崎も会長先輩もホッと胸をなでおろしている。

「そ、それにしても今日はどうも集まり悪いですね、俺のハーレム」

この空気を変えようと杉崎が話題を振ろうとする。こいつのこういう積極性というか、気が回る立ち回りはさすがというべきか。

「キー君のハーレムじゃなくて生徒会ね。いいんじゃないかしら？別にこれといってイベントもあるわけじゃないし。結局お菓子食べて喋るだけじゃない、最近」

先輩の言うとおり、基本生徒会メンツ全員が集合してもまともに仕事するわけでもなく各々が自由に過ごしつつ、駄弁って終了。正直お茶会をやってるもんだ。

俺は俺でジャンプを鞄から取り出して読み始めてるし。

「分かってないですねぇ、知弦さん。基本的に好感度は直接会わないと上昇しないんですよ。ほら、ギャルゲだって、よく移動場所でヒロイン決まるでしょ？」

「当然の知識のように言われても困るけど」

「合わないと上昇はしない……しかし、お前の場合は合う度に好感度が減少してるよう

な気がしてならないんだが」
「それはお前の目が節穴だからだ!!俺のハーレムたちは素直になれないだけであって、内心俺と話してる時はドッキドキに胸がときめいてんだって。だから、今日も彼女らは俺との愛を育むためにイベントとかなくてもここに足を運びに――――――」
「だからこないんじゃないかしら。むしろ」
　またもやバッサリ。杉崎がときめき云々抜かしてた時、何気なく会長先輩の方を見てみたら。んなわきゃないと首を振っていた。
　節穴なのは俺じゃなくてお前なんじゃないんですかねぇ。
「でも、知弦さんは俺との愛を育みに来てくれたわけですね！」
「はい、ユー君。アメ食べる？」
「あ、ども。いただきやす」
　知弦さんがこっちに腕を伸ばし、掌に置かれた飴玉を受け取る。
　包装フィルムを見てみると、いちご味と書かれてた。
　なんだ案外普通の味じゃん。先輩のことだからハバネロ味とかサルミアッキとか渡されるんじゃないかと警戒しちまった。
「……あ、それで、キー君。何の話だったかしら」
「……くっ！しかしこういうクールキャラこそ、惚れたら激しいに違いない！」

いや、杉崎よ。それは二次元の話であって、三次元でキャラ設定を決めつけるのは如何なものかと……あ、でもこの世界じゃどっちでｍ――――

「それいじょういけないわ！」

割りとタブーな事に触れようとしたら、会長が俺のとこまでやってきて、俺の口に何か貼り付けやがった。

……なにコレ。シール？

「あ、それは正解。激しいわよ、私。小学校で私に告白してきた男の子がいたのだけど、一日３００通『好き』とだけ羅列した手紙渡して、精神崩壊まで追い込んだから。意外と脆かったから、私のお眼鏡にかなわなかったけどね……貴方たちはどうかしら？」

小学生からこの人はそんなことをしていたのか……Ｓの才能が開花したのはその頃からだったのか？

ていうか、会長の震えっぷりが尋常じゃないんだが。顔は青ざめ、自身の体を守るように抱きしめてガクブルとしている。体に万歩計でも貼っつけたら結構な数値がカウントされるんじゃなかろうか。

ていうか、貴方たちはってことは……俺も入ってるわけ？ココに男は杉崎と俺しかいねーから、そうだとは思うが。

で、杉崎はというと……意を決したかの様なキリっとした顔になっていた。

中身はともかく、面はイケメンの部類に入りやがるからなこいつ……イケメン爆ぜろ。

「分かりました」

「え、この話聞いた上で覚悟できたの？それちょっとポイント高いわ。私の中でキー君に対する評価が若干――――」

「知弦さんとは体だけの関係を目指すことにします！心は入りません！」

……これは俺でもわかる。冗談か本気かは知らんが、かなり最低な回答をしたんじゃないかコレ。

会長先輩でさえ、ないわーとか言ってるくらいだし。

にしても、こいつは本当に自分が主人公だと言い張る気なのだろうか。少なくとも王道物のギャルゲーとかエロゲーの主人公ならばそんなゲス発言はしない。

今のお前は主人公だとしても、鬼畜外道もののジャンルの主人公って言ったほうがしっくりくる。

残念なイケメンというのは杉崎に用意されたような言葉なんだろうなー

「……ユー君はどう？私の全てを受け入れる自身はあって？」

あ、杉崎の発言はスルーですか。道端に落ちている石ころのごとくスルーされた杉崎

はまだ好感度が足りないというのか……と顎に手を当てて真剣に考え込んでいた。
いや、むしろ好感度が高けりゃ高いほど体だけの関係は難しいと思うんだが……
で、見事な作り笑顔をこちらに向けてくる先輩に、俺は会長先輩に貼り付けられたシールをビッと剥がし。
「そうですねぇ……受け入れるかはまた別の話だとして、どんな形であれ、そうやって好意を伝えてもらうのは悪く無いですね。手紙３００通書くのだって、結構な時間を浪費するわけで。自分の貴重な時間を好きな人に割くのって中々出来ることでもないと思いますし。まぁ、俺的には文字よりかは言葉で言われる方がいいですが」
柄にもなく、長く語ってしまったが紛れも無い本心である。アレだよ。よくアニメとかギャルゲのヒロインで、ヒロインが主人公の趣味や好きなことを知ろうと努力するシーンがあったりするじゃん。ああいうのめっちゃクルものがある。
健気に頑張る姿って良いと思うんですよ。ヤンデレとかも個人的には有りだとは思う。好きな人をどうこうしちゃいたくなるほど好きってことなんだろ？男冥利に尽きるじゃん。
まー、空鍋とかＮｉｃｅＢｏａｔ展開は見る分はいいが自分があんなめに合うのは御免こうむるが。
「そ、そう……」

てか、自分で言ってはなんだけど結構恥ずかしいことを真顔で言ったんじゃないか俺？現に先輩がそっぽ向いて宿題の方に戻っちゃったし。

……あれ？先輩良く見たら耳まで赤くなってるような……宿題に向かってるせいで俯いてるからちょっとわかりにくいが、なんかニヤけてない？

照れてるのか、それとも俺の回答がマジレスすぎて笑いがこみ上げてくるのかはわからんけど……

「よく見ておきなさい、杉崎。アンタより四季の方がよっぽどギャルゲーの主人公やってるわよ」

「ぐっ……う、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおー！ハーレムの主は俺なんだあああああああああああぁぁぁぁ!!!」

あいつは叫ぶことが好きなのだろうか……会長先輩は人を指差すんじゃありません。

杉崎が壁に向かって「ハーレムの主は俺だ」と何度も連呼しまくって、ゆらゆらと頭をぶつけまくっているが、誰も止めはしない。自己暗示かけるほど追いつめられてるの

かあいつは……？

哀れみの視線を向けていたとこで、ふと会長先輩の方を見てみると先輩のスナック菓子をサクサクと食べまくっていた。

「あの会長先輩。そんなに食って大丈夫なんすか？」

「うぐっ……こ、このくらいなら問題ないわよっ」

「いや、あなた昨日も先輩のお菓子漁ってましたよね」

昨日どころか、先週もそんな感じだった気が。間食するのは個人の自由だと思いますが、毎度先輩のお菓子をつまんでるのは如何なものか。

この年頃の女子は色々と大変だと聞くし。

会長先輩自身食いまくってることに多少は自覚があったのか、摘んだスナック菓子と自分の二の腕を見比べている。

「あ、漁ってなんかないもん！知弦のお菓子に毒が入ってないか、会長兼親友たる私がまず毒味を……」

「貴方は毎回毒味なんてしてるんですか？先に先輩が食べてるんですし、毒味する必要性はないじゃないですか」

「……っていうのはうーそっ、本当は知弦がお菓子を食べ過ぎて太らないように、私が食べて……」

「そんなことばっかしてると太りますよ」
　あ、言った。俺がさっきから遠回しに伝えようとしていたことを杉崎が代わりに直球を投げてくれた。
　会長先輩完全に固まっちたよ。
「……大丈夫！代々桜野家ではお菓子から摂取したエネルギーを身長に回してくれるスキルが受け継がれてて」
「そんな便利スキル持ってして、そんなおこちゃま体型ですか」
　杉崎の言葉に思わず先輩の方を見てしまう。偶然視線が合うと先輩はにっこりと微笑む。
　……比べちゃいかんが、とても会長先輩と先輩が同年代だとは思えん……
「ちょっと！今絶対知弦と私を比較したでしょ!!」
　バレテーラ。露骨に先輩を見ていたのがいけなかったのか、会長先輩はハムスターのように頬を膨らませて俺の方をにらみつけてくる。
「そ、ソンナコトハナイデスヨ」
「わかりやすいくらいに棒読み！今に見てなさいよっ！私の成長期はまだまだこれからなんだからっ！」
「会長の成長期はとっくに過ぎていますよ」

「……ええぃっ！」

あろうことか、会長先輩は先輩のお菓子を袋ごと奪い去り、袋を掲げて全て食べ尽くしてしまった。

なんとも潔い食い方だな。

「……次の問題の回答はメタボリックシンドロームと」

「……」

先輩がノートに目をやったまま、そんなことを呟いていた。

そんな回答の問題が出たのかはしらないが、今の先輩の言葉に会長先輩はがっくりと項垂れていた。

後悔するくらいなら食べなきゃよかったのに。

「大丈夫ですよ、会長。もし、もらいてがなくなったら……」

「え？もしかして……太った私でも好きって言ってくれるの？美少女じゃなくなっても？杉崎……あなた……」

こいつの切り替えの速さは見習うべきものがあるよな。すっかり鬱モードから回復した杉崎は涙ぐむ会長先輩の肩に手を置き、何か慈愛の満ちた笑顔で会長先輩に告げた。

「もらいてがなくなったら……仕事に生きてください！」

「リアルなアドバイス!?」
「俺、陰ながら応援しますから！」
「陰からなんだ！私、基本は見捨てられるんだ！太った私には価値なんてないんだ！」
「まぁ、ですから太らないように気をつけてくださいっていう、俺なりの叱咤激励ですよ」
「あうー」
「ハーレムの主とやらはスパルタなんだな……自分には甘いくせに」
「何を言う！俺は常に自分を磨き続けているさっ、俺を愛する女の子たちも妥協することなく自分を磨き続けて欲しい！そう思ってるだけだ！」
　それっぽいこと言ってるように見えるが、早い話が美少女は美少女のままでいろってことですね、わかります。
　でもまぁ、杉崎が頑張ってるってのは事実なんだよなー。こいつ、人格破綻者に見えるが中身のスペックはかなり高いわけで……
「そういうわけなんで頑張ってください！俺のハーレムに留まるために！」
「あ、なんか急に太ってもいいような気がしてきた」
　真顔で言い放つ会長先輩に杉崎は首を捻っていた。
　杉崎がまともっぽいことを言った次の瞬間には何かしらのオチが回ってくる。これ

がいつものパターンである。

一通り会話が終了すると杉崎はどうしたらみんなをデレさせることが……等と言いながら、なんかのギャルゲーの攻略本を読み始め、先輩は宿題の方に集中し始め……会長先輩は先輩が次に出したお菓子を躊躇なく食べ始めていた。

杉崎のハーレム云々を抜きにしても、そんなにお菓子ばっか食べてると夕食食えなくなっても知りませんよー？

俺もジャンプの続きを読み進めようと、視線を下の方に移した。

お仕事しないで駄弁る生徒会２

「おっくれましたー！」

「す、すいません……」

どうしたらもっと効率良く女の子の好感度を上げることができるのか……俺が岡○先輩にご教授願おうとＣＬＡＮ○ＡＤの攻略本を読み返していると、戸がガラガラと開き対象的な態度で女子が二人入ってきた。

先に前を歩く元気娘ツインテール少女が椎名深夏。俺と同じ副会長でクラス委員長。同じクラスメイト。つまり、俺、深夏、優は同じクラスだ。そして美少女!!

運動神経も良く、スタイルも抜群に良い！様々な美少女を観察していた俺にはわかる。あいつは……

脱　い　だ　ら　も　っ　と　す　ご　い!!!

……おっと、いかん。想像しただけで鼻血が……ティッシュ、ティッシュ。

そんでもって。男女誰からも好かれる爽やかな性格が人気に拍車をかけ……人気は

うなぎ登りである。
勉強もかなり出来、文武両道な完璧美少女に見えるが実は彼女若干百合気質気味なうえに、例外はあるが男嫌いする気質がある。
特に俺みたいなちゃらちゃらしてる（多少自覚あり）ようなのにはキツイ。同じ副会長って立場も手伝って、俺とは良く敵対する傾向にもある。正統派のツンデレなのである。
現状ツンしかないが……これも例外を除いて。
そして、その背後から薄い色彩のストレートヘアを揺らしペコペコと俺達に頭を下げつつ、俺と視線が合うと焦って外してしまう、なんとも愛らしくて守って上げたくなる少女が椎名真冬。
ここでの役職は会計だが、役職名はここではあまり意味をなさない。
名前からわかるとおり、深夏の妹。でもってこれまた超がつくほどの美少女。
姉の深夏に全部元気を吸い取られて生まれてきたような儚げな女の子で、その上男性が苦手という……一部男子の琴線に触れまくる子なのだ。……にっくきことに、これまた例外が存在するが!!
まぁ、容姿に関しては正直話さなくてもいいと思ったが……形式上……ね。詳しくは

俺が書いた一存を読んでくれ！

おっと、こんなことを言ってたらステマとか言われちまうな。

ん？なんで視点が優から俺に代わってるのかだって？そいつは簡単。あのバカジャ(優)ンプに集中しすぎて、周りが気にならなくなってるからだ。

あいつ、ああ見えて結構な読書家なんだよな。授業前の休憩時間とかＬＨＲ前の空いてる時間とか隙あらば本を読んでるからな。特にジャンルとかも拘ってるわけでもなく、文庫本だろうが、ラノベだろうが、漫画だろうが、参考書だろうが本ならなんでも読むらしい。

たまに生徒会が終わってから、図書室に寄ることもあるみたいで、中学の時は図書委員だったとか。本人曰く、委員会の時でも好き勝手に本読めるからなった……といった理由でなっただとか。

俺からしたら、この美少女ハーレムに紛れ込む異分子で知弦さん筆頭に椎名姉妹たちを惑わすにっくき！存在なのだが……こいつ、ぶっきらぼうに見えて面倒見が良いうえに気が回る。他の人が嫌がりそうなことそれとなく自分がやったり、細かいことにも気付くし……あいつとはまだ短い付き合いだが尊敬するべき部分が多数あったりする。

悔しいが、あいつを見習うべき所は遠慮なく習得し、盗める技術はどんどん盗んでかないと！俺は絶対！美少女ハーレム王になる!!

「そうそう、深夏と真冬ちゃんは初めての時はあんなに面白かったのにみたいなことって、なんかあるか？」

椎名姉妹が席に付くのを確認し、俺は会長が言い出した話を二人に振ってみる。

近くに美少女二人が座ったというのに、優のやつは相変わらずジャンプにお熱でいやがる。

おい！真冬ちゃんが気になって顔を覗き込んでるんじゃねぇか！控えめに覗きこんでる真冬ちゃんギガかわゆす!!気付けよこのやろー!!

「なんだよ、藪から棒に」

俺の隣に座った深夏が不審そうに見てくる。

真冬ちゃんと違い、特に優を気にしてなさそうに見える深夏だが……俺にはわかる、否わかってしまった。

深夏……いつもよりそわそわしていることに!!

くそぅ！興味なさそうにして、実はめちゃくちゃ気になってしかたがない!!なんていうツンデレのテンプレ!!

けどその対象が俺じゃない……い、いや！まだ諦めるのは早い。実は俺に抱きつくたくて、抱きつきたくて、しょうがないけどこの場では人の目があるから恥ずかしくてで

きない……うおおおおおおー・イイー・超イイゾ!!なにかがタギッてきたあああああああああああああ!!!!

「……なんか変なこと考えてやがんな」

おおっと。深夏の視線がより一層不審そうに見ているジャマイカ。

「変な事じゃないさっ☆ただ深夏のことを考えてただけさっ☆」

「なんだまた会長がまた変な事でも言い始めたりしたのか？」

……俺の渾身の美少女撃墜スマイルはスルーされてしまった。

うぅむ……『美少女を我が手の物に！４８の秘訣！』のこれで女の子もイチコロ☆必殺スマイルのとこを読んだはずなんだけどなぁ……何がダメだったんだろ？

「む！・またとはなによ！・その言い方じゃ、いつも私の格言がスベってるみたいじゃない」

「会長。過去の偉人から丸パクリしたものをあたかも自分で作った様に言うのはどうかと」

「……世間がつまらなくなったんじゃなくて、自分がつまらくなったと思うのよ！・」

図星を付かれた会長は最初の発言とは微妙に変えて、生徒会室に大きく響き渡るように言い放った。

深夏はそれだけで、俺が言った事をだいたい理解できたみたいでなるほどなぁと納得

していた。
　真冬ちゃんも理解したみたいで、うーんと考えこみ始め思い当たることがあったのか一番最初に口を開いて返してきた。
「ま、真冬はお化粧……コスメですかね」
「化粧？」
「はい。子供の頃は母親がしているのを見て、すごくしたくてしたくて仕方なかったんです。それで中学生の頃、初めて自分のコスメを買った時は嬉しくてたまらなかったんですけど……良く考えると真冬、あんまり自分を着飾るのって好きじゃなかったみたいで……結局、あんなにはしゃいでたのに最低限のことしかしなくなったといいますか……」
「あぁ、なるほどね。真冬ちゃんらしいなぁ。でも大丈夫だよ！真冬ちゃんは化粧なんてしなくても十分かわいいから！むしろ、真冬ちゃんの本来の美貌を隠してしまう化粧なんて、無いほうがいい!!」
「あ、ありがとうございます……」
「こら鍵！あたしの前で妹口説こうとすんな！」
　真冬ちゃんが俺の言葉で頬を染めて縮こまっていると、そこに深夏が突っかかってきた。

いつものことだ。俺は嘆息し、隣の席の深夏の肩に手を置く。
「まあまあ、嫉妬すんな深夏よ。……お前もちゃんと魅力的さ！」
「いやいや、嫉妬じゃねーから」
「深夏にも、結婚すれば真冬ちゃんが義妹になるという大きな魅力が……」
「しかもあたしの魅力じゃねぇ！」
深夏はすごく怒っていた。恥ずかしいからって、手を払いのけなくてもいいんだぞ☆
この、や、き、も、ち、さ、ん。
「（ゾワワワッ）ひぃぃ!?と、鳥肌がっ!?」
「おぉ!?遂に以心伝心までっ！ゴールインは近い！」
「身の危険を感じるだけなのになんで喜んでんだよ!?怖いよもう！思い込みが激しすぎて怖すぎるよ!!」
「思い込み……？ふふふ、仕方ない。そういうことにしておいてあげるよ。て、れ、やさ～ん」
「……おらぁ！」
「たわらばっ!!」
な、ナイスアッパー……少し言葉を選び間違えてしまったのか、怒りの臨界点がデレ要素よりも勝ってしまったようだった……天井に激突してから、床に落た俺は顎と背中

の痛みに耐えつつ席に戻ろうとする。
「……あ、あの。お兄ちゃん。お兄ちゃんは初めての時はあんなに面白かったってことは何かあったりする？」

お　に　い　ちゃ　ん！

思春期真っ最中の男子学生なら、５人に４人は妄想するだろう妹キャラ。
ひとつ屋根の下で年頃の美少女の妹と生活……朝は妹に甘ったるいボイスで起こしてもらい、一緒に学園へ登校。
学校が終わっても、帰る道は同じで四六時中妹と一緒……そんな夢の様な生活。
一人っ子の男子ならなおさら妹を欲しがってもおかしくないはず。
しかも、今お兄ちゃん発言したのは真冬ちゃんだぞ？美少女だぞ？薄幸の美少女と言われてもおかしくない真冬ちゃんだぞ？……妹にしたい碧陽学園美少女ランキングでぶっちぎりのトップだった真冬ちゃんが……!!
俺じゃない男に!!!血のつながりなんてないのに!!!!ますますギャルゲーの主人公っぽくて憎らしいんじゃあああああ!!!
全国の妹好きの男どもよ!!!叫べ!!!今この場にいる俺じゃない男に向けて!!!!!妬みと憎

しみを最大限に込めて……叫べ!!!その叫びが俺に力を与えてくれる!!
　みんな!!!オラに力をわけてくれえええええええええええええええええええ!!!!

「……あのさー、杉崎。毎度真冬ちゃんが四季のことをお兄ちゃんって呼ぶ度に変なリアクションしたりしないでくれる？」
「どぁぁ〝ぁ〟ってえええええ!!!お兄ちゃんっ娘ですよ!?真冬ちゃんにお兄ちゃん呼ばわりされるとか幸せすぎんだろ!!!憎いんだよコンチクショー!!!!!」
「な、泣くこたぁないだろ……」
　隣の深夏がドン引きしてる。心なしか、さっきよりもイスの距離が遠くなってるような気もしなくはない。会長もさっきまで宿題に集中してた知弦さんも手を止めて、俺を冷めた目で見ていた。
　くそぅ！真冬ちゃんに、袖を小さく摘まれやがって！真冬ちゃん！そんな美少女に興味薄な男じゃなくて、俺にしてもいいんだよ!?俺はいつでもＷｅｌｃｏｍｅなんだからネー!!!

「……あ、あの。お兄ちゃん。お兄ちゃんは初めての時はあんなに面白かったってことは何かあったりする？」

ん……？誰かに右腕を引っ張られた感触がしたので、顔を上げて横を見てみると引っ張ってきた主は真冬だった。

いつのまに来てたんだ？真冬がいるってことは……やっぱり。深夏も来ていたか。

いや、それよりなんで杉崎の奴は号泣してるんだ？情緒不安定なやつだなぁ……

真冬の発言からして、最初の会長先輩の言葉についてだろうな。取り敢えず、読者の皆様に椎名姉妹との関係性を
軽く話しておくか。

俺と椎名姉妹とは幼馴染。

「そうだな……俺の場合は――――――」
「「ってちょっとまったー!!」」
「……こんな近くで大声出すなよ」
「出したくもなるわ!!軽すぎだろ!!前回のあらすじ並に簡単すぎるぞ!!」
「そうだよっ！最後に以上ってついてもおかしくないくらいだし！」
「いや、まだ1話目だっつーのに説明ばっかだし、さっきもお前らについては杉崎が解説してくれたし別にいいだろ」
「ぜんっぜん良くないっての！いくら議事録として書いているとはいえ、メタ発言はや

めろ！」
「それに杉崎先輩が話してくれたのは原作の私達についてでしょっ！タグにも付いてる通り、原作崩壊の部分におもいっきり触れてるんだから、ここはもうちょっと掘り下げようよ!!」
「ああ、わかったわかった。今文章にするから。すりゃいいんだろ」
議事録を執筆してる時に、この二人が割り込んできたせいで折角次に書こうとした文章がパーになってしまったじゃねーか。
んじゃ、次からＴＡＫＥ２ってことで。

俺と椎名姉妹とは幼馴染。二人とは小学校からの付き合いで、小中高と今まで通う学校は同じで家は隣同士というわけではないが、同じマンションのお隣さん。ただの隣同士なら、付き合いがなかったかもしれないが俺の母親と向こうの母親が昔からの親友同

士だったらしく、今現在もめっちゃ仲が良い。

ガキの頃は男とはいえ、まだ子供。母子家庭で母が仕事で帰ってくるのが夜中になることも割りとあったりしたので、椎名家のとこで寝泊まりしたこともあるし、逆も然り。椎名家の父と母は仲が良く、家族４人で旅行することも多ければ夫婦二人だけで旅行に行くこともたまにあったりして……深夏と真冬がこっちに泊まることもあったわけだ。

まー、そんなこんなでガキの頃は３人で遊ぶことが多く。外で遊ぶことが好きだった深夏を筆頭に本を片手に深夏との後ろを付いて行く俺と俺に手を引っ張られながら、深夏に置いてかれないようにトコトコと頑張ってついてくる真冬。日が暮れるまで公園なんかで遊んだりして、遅くまで２人を連れ回すんじゃない！って母さんにゲンコツくらったよなぁ……どちらかといえば、深夏が遊ぶに行こうぜって誘ってくるのがほとんどだったんだが……男が言い訳しないっ！なんて余計に拳をもらったのも今じゃ良い思い出か。

俺と深夏が中学に上がってからは３人毎日一緒ってわけじゃなくなったが、放課後家に帰ってからは２人が遊びに来たりして、真冬オススメのパーティーゲームをやったりしたっけなー。

ガキの頃から３人一緒にいる時間が長かったので、真冬は俺のことを兄のように慕ってくれ、深夏とは親友とも言える間柄になった。

うん、1語り始めたらキリがないからここまでにしとくか。こんくらい書いておけばあいつらも満足するだろう。

「そうだな……色々あるとは思うんだがパッとすぐ思いつくのは本だな」
「本っていうと、同じ本は2回以降読むと楽しみが薄れるみたいなか？」
深夏が俺の目の前に置いたジャンプを取って、左右に振る。
良いセン言ってる回答だがそれじゃあ、満点はやれないな。今ので7割ってとこだ。
「んー、ちょっと惜しいな。物によっては読み返すことで新しい視点が見えてきたりするだろ」
「そうえいば、真冬も久し振りに読んだ恋愛小説で真冬もこんな恋愛してみたいな……って初めて読んだ時はそう思ってたんだけど、いざ読み返してみるとこの主人公はないですって思っちゃったかな」
何気に辛口評価を下す真冬であった。どんな主人公か気になる……ダメ元で今度貸してくれと頼み込んでみるか。
「それは恐らく、精神面が初めて読んだ時よりも発達してるからかもな。昔は良く意味がわからなかったものも数年後には意味がわかるようになって、感動したり……なんてことも良くあることらしいしな」

これは本だけでなく、映画とか芸術関連等にも当てはまるだろうな。
ほら、ポケ〇ンのミュ〇ツーの逆襲とかだって大人になって見なおしてみると、目からハイドロポンプしましたとか言うじゃない。
……なんだろう。よくわからんが、この話題はあまりよろしくない気がする。書いて泣きたくなってきた。
「で、もう正解言っちまうが俺が初めては良かったって思うことは……犯人やトリックをわかってる上での推理物だよ」
『あー』
全員思い当たる節があるようで、納得したように声をあげていた。
わかるだろ？ああいうのは
「たしかに、犯人はこいつってわかってるのに推測や考察を読んでもなぁ……」
「しかもそれが主人公とかの親しい人物が犯人だったら、余計にだな。推理物のドラマが再放送しているのを見てて、その友人が誰がこんな酷いことを……なんて言ったのを見てつい、お前だろ！って叫んじゃったな」
正義感が強いからな深夏は。ドラマを見ている時の拳を振るいたくてうずうずしてるのが想像できてしまう。
「一度、クラスメイトの馬鹿に読んでいた推理物の犯人をネタバレされた時がありまし

たけど……あの時は本気で殺意が湧きましたよ」
「ユー君からしたら、楽しみにしていた物が横から奪い去られたような感覚だったのかもね」
「私が四季の立場だったら絶対怒ってたわね、うん」
「ね、ネタバレは重罪ですよねっ」
俺の気持ちがわかってくれたのか、先輩組と真冬が同意してくれる。
その重罪を犯したクラスメイトだが、そいつは去年からのクラスメイトでなぜか微妙な超能力。略して微能力を使えるというバラエティー番組に向いてそうなやつなんだが……原作読んでる人たちにはわかるだろう。
悪友とも言える奴に仕出かされた俺はあいつが半径数メートル以内なら、テレパシー……人の心を読むこともできるのでそれを利用して、聞いてるだけで鬱になりそうな話を黙読してやった。ざまぁ。
真冬の要望どおりに一通り答えたので、ジャンプの続きを読もうと深夏から取り戻そうとしたが
「どうせもう読み終わったんだろ?あたしにも読ませてくれよ」
俺が返事をする前に読み始めやがった。たしかに一度全部読んだけどさ……なぜわかった。

手持ち無沙汰になってしまったので、まだ読み終わってないラノベ。バ○とテ○トと召○獣の９巻を読もうと鞄から取り出そうとしたが……

「お兄ちゃんっ、マ○カしましょう！・マ○カ！」

３ＤＳを両手で持って、こっちをキラキラした目で見てくる真冬がいた。どう足掻いても俺に本を読ませない気かこの姉妹は。

まぁ、正直暇さえ潰せりゃなんだってよかったので二つ返事で了承し、自分の３ＤＳを取り出す。

こんな感じに真冬が生徒会でゲームしようぜ！・なんて言ってくることが少なくないので鞄の中に携帯していることにしている。

最初は学校にゲームなんて持ち込まない！なんて、会長先輩の怒りの言葉を受け取ったのだがその言葉に、真冬は白い肌が目に見えて赤くなる程怒り、１時間弱ゲームについて会長先輩に語って以来……生徒会室では一日ゲームは一時間まで！というルールを守れるならゲームやってもいいよと会長先輩は妥協案を出したのだ。

真冬はそれに渋々ながらも了承してたが……そもそも、生徒会室に長時間いることはそうそうないんだがな。

各々が思い思いに過ごしていると……

「ううん、ハーレム万歳。いつ見てもいいねぇ、この光景。お邪魔虫が一人いるけど、頑張って生徒会に入って良かったなぁ」

ちらりとこっちを見てきやがったが、うんうんと満足そうにし一人悦に入ってるやつがいました。

おい、それってもしかしなくてもお邪魔虫って俺のことだよな？

「そういえば……キー君とユー君は優良枠で入ってきたんだっけ。ユー君はともかくとして、キー君の方はとてもそうは思えないのに……」

「そうだよなー。どっからどう見ても、ただの色ボケ男だってのに」

先輩の言葉に深夏が同意する。なにやら込み入った話になりそうなので、俺と真冬は一度ゲームを中断する。

にしても……入ってきた……ね。

「俺の場合は入ってきたじゃなくて、入らされたの間違いだけどな……」
ボソっと吐き捨てるように俺は呟く。
これに反応したのは杉崎を除く女子４人。
会長先輩はあ～と気まずそうにし、先輩はふいっと顔を逸らす。深夏は頭に腕を組み口笛を吹き、真冬はあははと苦笑い。
「そ、そうだったかしら？私はユー君は自分の意志で入ったはずじゃ」
「ほほう？人を罠に嵌めるために、後輩を使った人がそれを言いますか」
「うっ……」
１人目撃沈。
「だ、だから悪かったって……何度も謝ってるだろ？」
「深夏よ。物事全てが謝って解決するなら、この世に争いは無くなってる」
「ぐっ……」
２人目瀕死。
「で、でもでも！最終的には四季が入るって決めたことだし……」
「そもそも、入らないって選択肢は俺になかったですけどね」
「はうっ！」
３人目……

「わ、私は男の人が杉崎先輩だけじゃなくてお兄ちゃんがいて安心したよっ」
「真冬ー嬉しい言葉をありがとな。けどさ、兄の事を思ってくれてるなら、あの時ちょっとはこっちの味方になっても良かったんじゃないかなーと思うんだけど」
「あぅぅ……」
全員撃沈。バタリと机に突っ伏す、学園の生徒たちが認める美少女たち。
なんとも異様な光景だ。
「お、俺の美少女たちがー!!」
さっきまで悦に入っていた表情から一変、力尽きた女子たちに嘆く杉崎。
深夏か会長先輩の体力が残ってたら、杉崎の発言にツッコミ入れてただろうが、しない辺り俺の口撃（誤字にあらず）が余程効いたとみた。

「……」
死屍累々と化してる生徒会室。俺はスッと目を閉じてここに入ることを強いられたあの時を思い出す。
……そう、アレは今年の人気投票が終わり、その日の放課後深夏に声をかけられ……

「な、なぁユウ。コレ今年の委員、部活の申請書なんだけど」
普段のようにハキハキと滑舌良く元気ボイスではなく、上ずり気味で挙動不振な深夏だったが、その時俺はベストセラーとなった作家の本を読むのに夢中でいて、特に気にしなかったんだ。
……ここで気付いていれば深夏の怪しさに警戒できたはずなのに。俺は早く続きが読みたくて対応が雑になっちまったんだよな。
「おー、サンキュー。後で書いとくから机に置いといてくれ」
「そ、それがさ。先生が今日中までに提出してくれって」
「今めっちゃ良いとこだから、幼馴染みのよしみってことで代わりに書いといてくれや」
「お前が自分で書かないと意味ないんだって！ほら、ここに名前と学年を記入して……」
学年が上がる度に部活、委員に入ってない生徒はこうやって書類を書いて、今年も帰宅部でいますってことを年１に更新しなきゃならない。
俺は本から目を逸らさずにいて、深夏が俺にシャーペンを握らせ記入要項のとこに導く。俺は何も疑いもせず、確認も怠ったのが仇となった。
いいか、読者の諸君。誓約書とか自分の名前を記入するモンには絶対確認を怠るなよ！自分の名前を書いたり、印を押すってことは責任とか全て自分が背負うってことなんだからなっ！

「これでよし！先生に提出しておくからな。それじゃ、また明日！」
「おー」
かっさらうように申請書を持って行き、疾風のような速さで去っていった深夏だったが依然として俺は読書しており……俺が生徒会に雑務として加入した事と、深夏たちに嵌められたことを知ったのは翌日であったとさ……
登校した時、校門前で担任が朝の挨拶活動をして生徒たちに挨拶しまくってる時に俺へ向けて
「生徒会を頼んだぞ！まともなお前が入ってくれたことで俺の肩の荷も下りた！これで生徒会をまるなg――――げふんげふん！いや、なんでもないぞ！頑張れよ!!」
朝から暑苦しくバカでかい声でんなことをのたまったせいで、俺が生徒会メンバーに加わったという事実無根な情報は瞬く間に学園中に広まっていやがった。
最初は担任が妄想癖に囚われたのかと思い、腕の良い医者がいる病院を紹介してやった。が、逆に心配されたのは俺で……
「いやいや、なんで俺が生徒会に入ってることになってんスか。一度断ったじゃないですか」
「む？だが、昨日椎名が俺に生徒会役員記入要項の書類を持ってきてたぞ。記入すべき所は全て埋まっていたし、お前の名前も書いてあったし、昨日からお前は生徒会雑務っ

てことで一年就くことになってるからな」

「……みなつぅ!!」

昨日の自分の行動をよーく、思い返し、この時ようやく俺は深夏に陥れられたことに気付いた。

俺が昨日からベストセラー本に手を出していること。

一日で読んでやると宣言していたこと。

俺が本気で集中して読むと周りが気にならなくなること。

……深夏があんな計算尽くされた行動を思いついた上で実行するとは思えん。必ず誰かがバックにいるはず。

俺のことを知り尽くしていそうな人で、人を掌の上で躍らせることができる人物。

且つ、ベストセラーのことを話した人物となると……もう答えは決まってるようなもんだ。口に出すまでもないが……あえて俺は出した。

「せんぱぃいいいいいいいいいいいいいいいい!!!!!」

……そんなわけで、今朝登校する時深夏と真冬が今季生徒会メンバーの集まりが朝早くからあったため、先に登校していたことを知っていた俺は脇目もふらず生徒会室に全力疾走した。

俺はなんとか役員を辞退しようと抗議しにいったが、先輩は諦めなさいなととても素晴らしい笑顔で。

深夏は今日から頑張ろうぜと俺を嵌めた罪悪感に囚われつつ、気まずそうにしながらも俺が生徒会メンバーに加わってるのは決定事項みたいな。

会長先輩は四季なら大歓迎ね！これから私のために働き、私のために生きなさい！と、生徒会役員は一生を賭ける気持ちでやらなきゃならんのですかとツッコミを入れたくなるほど、ノリノリだった。

唯一俺の味方をしてくれそうな真冬は……俺が生徒会役員を拒まないと信じきってるような、俺と仕事できることを嬉しそうにしていた。

５ＶＳ１と圧倒的不利な状況。わかりやすくゲームで例えるなら、スラ○ム１匹ＶＳ

ダーク○レアム。自分の％は９９９で相手は７人且つ蓄積ダメージ０％。相手バトルチップ使い放題、自分バスター縛り。楽曲レベル２９を初見オワタ式速度１プレイ……ｅｔｃ、ｅｔｃ。

早い話が絶望的。

なんとか、辞めれないか朝のＨＲが始まるまで粘ろうとしたが……良く良く冷静に考えてみたら、まったく歓迎されずにむしろ向こう側が辞めさせようとしてるわけでもなく、逆に好意的。

先輩曰く、ここの学園長までもが既に今季の生徒会メンバーを承認してるわけで……逃げ道はない。

ここで断って、嬉しそうなみんなの笑顔を曇らせるのもなんか見たくないと思ってしまった俺はお人好しなんだろうな。

罠にはめてしまうほど好意を持たれてるって考えればイイんだと俺は無理やり言い聞かせ……最終的に俺、四季優は生徒会雑務の職につきましたよと。

役員になることを告げた４人のあの時の表情は今でも覚えてる。……言ったら調子に乗るだろうから本人たちには言わないが、あの本当に嬉しそうな笑顔を見た時つい、見惚れてしまったというのは内緒だ。

「ま……なんだかんだ言って、楽しくは過ごせてるし今じゃ生徒会に入ったことは後悔してないんですけどねー」

これは本心。俺が委員会やら部活に入ってなかったのはバイトを多くこなしたかったためであり、家計の助けに頑張ろうとしたのだが、母さんに俺がやりたいことを我慢してまでしなくてもいいと心配されちまったしなぁ。

そういう意味でも俺が生徒会に入ったことは良い傾向……だと母さんは喜んでいた。

……喜ぶのは良いんだが、生徒会に深夏と真冬がいるからって向こうの母親に朗報だと興奮気味で連絡するのはどうかと思ったが。

俺の言葉にさっきまで死んでいたメンバーが徐々に復活し、安堵を含めた笑顔を向け

てきた。

ま……こうやって、基本駄弁るだけの生徒会だけどこのゆるい空気を過ごすのも悪くないんだよな……

お仕事しないで駄弁る生徒会3

「さっきの紅葉先輩とお姉ちゃんの会話で思ったのですけど……杉崎先輩とお兄ちゃんって成績優秀者なんですよね？」

あぁ、その話続けんのね。俺が勉強出来るのは知ってる真冬だったが、杉崎も普段の言動行動からして勉強できる奴だとは思わんだろう。

それと優良枠とはさっき話したと思うが、人気投票とは別の方法で生徒会に入れるシステムとはこれのことだ。

わかりやすくいうと、学年末の試験で成績がトップの学生を指す。その学生は任意で生徒会に入ることができる。今年は俺と杉崎が同立トップだった。杉崎はもちろん、即返答で生徒会に入ったがさっきの回想で先生にも言ったが、俺は初めは断った。

このシステムは見てくれだけじゃなくて、中身も優秀な人物を獲得するために取り入れたらしいが、俺のように勉強が出来るやつが普通美少女だらけの生徒会なんて入らないだろ。周りに異性しかいないのに、その中に飛び込むのってかなり精神力がいると思うだよな。

良く、美女だらけの女子校に男のやつが入学したいとかっていう設定あるじゃん。想

像してみろ。基本趣味の合うやつはほとんどいないだろうし、女子しかいないわけだから環境も考え方も違うんだぜ？出だしが良けりゃ問題ないかもしれんが、失敗したら肩身の狭い思いをして学園生活を送らないといけないんだからな。

そういう意味では杉崎は凄いとは思うんだが……

「成績優秀ってか、たまたま学年末の試験でトップだったってだけだぞ俺は」

「ユーウ？それはあたしに対する嫌味か？」

「さぁな。深夏がそう思ってるんだったらそうなんじゃねーの？深夏の中では」

「……今度は負けねーからなっ！！」

下唇を噛み、悔しそうにそう宣言する深夏。深夏の発言からわかるかもしれんが、俺と深夏は前回学年末の試験で総合点数が高いか勝負をしていた。深夏が敗者は出来る範囲で何でも勝者に従う！というなんとも深夏らしい言い回しをして、勝負を吹っかけてきた。このやり取りをＬＨＲ中で担任がそろそろ試験だから勉強しとけよ！なんて、激を飛ばしてる中で宣言していたわけで……クラス全員が俺たちに視線が集まってたな。

男子たちの視線が突き刺ささり、似非超能力者からはその勝負俺に受けさせろとかテレパシー送ってきたし。

……お前じゃ深夏よりも成績悪いのは明らかなんだけどな。

あ、勝ったのはもちろん俺だったので深夏には今度俺の好きそうな本を買って来いとパシリの司令を出した。

それなりに難易度が高いのは当然だ。だって喧嘩吹っかけて負けたの深夏だし。

でもまぁ、長い付き合いである深夏からしたらそうでもないのかもな。俺がだいたいどんな本でも読むってことを知ってるわけだし。

だというのに、不服そうにしていたので……なら、今度本買いに行くから一緒に来て金は出してくれ。に変えた。

女に物を買ってもらうとは微妙に情けないかもしれんが、これなら深夏も納得できるだろうと思い提案したら、予想以上にご機嫌になっていた。

だが、本は自分が選ぶと聞かなかった。自らハードルを上げていくのか……

「散々言ってきたことだけど、やっぱりこの学校の生徒会役員選抜基準はおかしいわよっ！人気投票からしておかしいけど、優良枠にしても、成績面だけじゃなくてメンタル面まで評価に加えるべきだわ！そのせいで杉崎みたいなのが入ってきちゃうじゃない！」

会長先輩はバンッと机を叩き、もう何度目になるか数えんのもめんどくなった文句を言う。

で、その会長先輩の悩みの種である張本人も

「俺はこのシステム、最高だと思いますけどね」
　お決まりのパターンで反論していた。学園側が適当に投げているように見えて、実は理にかなってる点もあるからな。あ、そこら辺は杉崎の議事録読んでおいてくれや。
　こっちで同じこと書くの二度手間だし。字数稼ぎすんじゃねーとか言われたくもないし。
「しかし、鍵も良くやるよなぁ。そのパワーは尋常じゃねーぞ」
「そのパワーは別のベクトルに持っていくことをオススメする」
「頑張るのは悪くないけどね。でももうちょっと欲望は抑えたほうがいいんじゃないかしら」
　俺と深夏、先輩の言葉に会長先輩は激しく頷く。
　こいつがエロくなかったら、それはきっと杉崎の皮を被った何かに違いない。普段の杉崎を見てたら、この考えに行き着くのは当然である。
「俺は自分以外美少女のコミュニティに入るためならなんだってしますよ。入学当初ほとんど最下位の成績でも、一年でトップに上り詰めるぐらい、朝飯前です」
　自分以外って所でこっちを睨むんできやがったが、無視する。それは俺のせいじゃねーだろ。
「な、なんか真冬たまに杉崎先輩が凄く大きく見えます……」

「理由はなんであれ、努力を続けられるってのは中々できることじゃないからなー」
「お、おいっ！ユウに真冬！正気にもどれ！鍵なんかに憧れたりするんじゃないぞっ、私は幼馴染が性犯罪者になって、テレビに映ってコメントするのは嫌だからな！」
「ちょ！俺はまだ何も罪を犯してないのに失礼すぎじゃね!?」
「まだ？ということは計画してたりするのね」
「してもないですし、犯行に及ぶつもりもないですからね！変な詮索はしないでください！」
　両肩を掴み、必死な表情で揺さぶりまくってくる深夏。そ、そんな心配する必要ないから止めてくれ。
　気持ち悪くなるだろうが。
「た、たとえ俺が変態であろうと頭が良いのは事実！」
「あ、自覚はあるのね」
「紅葉先輩、今日はガンガン行ってますね……」
「先輩はいつもこんな感じだぞ真冬」
　さっきから先輩の鋭い言葉に、杉崎の勢いが弱まってきていた。先輩がSなのは今に始まったことではない。
　中学時代もこんな感じで俺はからかわれ続けてたし。

「動機が不純なんだよ……いい加減な心持ちで生徒を束ねる生徒会に在籍しようなどと――――」

「そうか。なら俺は生徒会役員でいるべきじゃないな。明日からまた帰宅部に戻るわ」

「――――副会長ならな！他はともかく、副会長以上の役職なら生徒の見本になるべき！」

今までありがとうございました。とみんなに一礼し鞄を肩に担ぎ、席を立って退出しようとしたら、物凄い速さで先輩と真冬が俺を拘束しにきてびびった。

ま、真冬がこんな俊敏に動ける……だと？

右腕を真冬に。左腕を先輩に取られ元の席に戻され、そのまま２人はいつのまにか俺の左右に置いてあった自分のイスに座る。

「いや、あの……何でくっついたままなんです？」

「だって、こうでもしないとユー君逃げちゃうじゃない」

「逃げませんから……腕離してくれません？」

「ふふふ……良い気分だわ」

俺の左腕は先輩の右腕に組まれたままでいて、先輩は俺の肩に頭を置いているので、自然とこっちを上目遣いで見るてくる形になる。先輩に離れてくれと言ってみるが、効果なし。目を閉じてリラックスしきってるようにも見える。

む、胸が当たらないとはいえ、これは色々と問題があるシチュエーションじゃないのか？

「そ、そうですっ！これはお兄ちゃんを逃がさないために……し、仕方なくやってるだけなんだからねっ！」

「おい、真冬。それただのツンデレだぞ」

「……そ、そうやって真冬を言いくるめようとしても無駄なんだからっ」

思わずテンプレ乙と口に出かけてしまうほどのツンデレ台詞を吐く真冬。指摘してやると、めっちゃ頬を赤らめ俺の腕を誰にも渡さんとばかりにしがみついてくる。

どうしよう。真冬が知らぬ間に性格が深夏よりになってきてるとは……ていうか誰かタスケテください。

左右からの頭がくらくらしそうな良い香りに、杉崎ではないが変な気分になってしまう。力づくで振りほどくのは簡単だが、相手は先輩と真冬。親しい相手にそれは如何なものか……なんて混乱状態に陥っていたら。

「ふ、ふしだらよっ！」
「あたしがああ言ったからって、堂々と手を出すんじゃねぇよ！」
「すぐるぅうううううううううううううう!!なにやってんだあああああああああああ!!」
会長先輩が先輩を。深夏が真冬を引き離してくれた。
杉崎は血涙流して叫んでいた。
「あわわっ、お、お姉ちゃんいたいよっ」
「あら、もう終わりなのね。ざーんねん」
力任せに引っ張られた２人だが、真冬は深夏の力の強さに痛そうに顔を歪め、先輩は……自ら離れていった。
会長先輩、どれだけ非力なんだろうが……まぁ、何はともあれ助かった。
俺がほっとしているのもつかの間……
「おいコラユウ！そんなに警察の世話になりたいか!?いいだろう。お望みとあらば呼んでやる！」
幼馴染が憤怒の形相でこちらに詰め寄ってきていた。……なんで俺が手を出したみたいな感じになってんだろ。
どう見てもあの２人からしてきたんだけどな……

「落ち着け。そんなことで呼んでも相手にしてくれないだろ」
「そんなことだとぉ!?てめぇ、優!美少女２人を侍らせておいてなんつー言いざまだ！よし、深夏!その贅沢者を取り押さえておいてくれ!俺は１１０番通報するから!!」
「おう!頼んだぜ鍵!」
やだこいつらめんどくさい。いつもは意見が対立したりしてるのに、なんでこういう時は息ぴったりなの？
俺がもう今日は本当に帰ろうかと考え始めてると深夏が――――
「え、ちょ、深夏さんっ？」
「お、お姉ちゃんっ!?」
「あら……」
「なっ……!」
俺の腰にしがみついてきた。先輩のイスに膝立ちし、俺の横腹辺りに顔を埋めていた。
ちょっとまて。これはさっきの２人よりもやばすぎる。
予想以上に成長している幼馴染のスタイルの良さを嫌でも実感してしまうほどの感触。
「ど、どーだ!これで逃げれないだろうっ」

赤い顔でこっちを見上げて、勝ち気なスタンスは崩さないでいたのは評価できるだろう。

って、そうじゃない！

「……」

「ふ、ふんっ。本当ならあたし自ら天誅を下してやろうと思ったが、私も警察にお世話になるのは嫌だからな」

「……」

「だから、私が最後の時まで付き添ってやる……か、感謝しろよなっ」

「あのさ……」

「なんだよっ」

「……あたってる」

「……え？」

「胸が」

「……」

俺の言葉に、俺から視線を自分の胸に移し、もう一度こっちを見上げる。そしてまた視線を胸に持って行き……しばし固まる。……が、次第に深夏の方がぷるぷると震えて行き――――

「この……変態やろうｇ――――――」
「――――――あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!今度は深夏だとぉ!?てめぇ!まだ俺にメロメロになってないハーレムメンバーから手を出すつもりなのかゴルァアアアアアア!!」
拳を繰り出すモーションに入っていた深夏だったが、杉崎が携帯片手にこっちを見て叫んだお陰で、深夏の動きが止まった。
……本当に通報するつもりだったのか。
「ちょっとまって、なにさり気なく私が杉崎にメロメロになってることにしてるのよ!」
「ええっ!」
「なにその新鮮な驚き!自意識過剰も甚だしいわね!」
「わかってます、わかってますよええぇ。そうやって言って俺に構ってほしいんですよねっ!」
「わかってない。アンタは何一つわかっちゃいないわ」
「そんなことはないですよ!俺は会長のことならなんだってわかっています!先週の日曜、近所の子供達と混ざって鬼ごっこしてたり、昨日資料室で高いところにある本を取ろうと背伸びして頑張ったのは良いものの、結局脚立を使っていたり、今日一番最初に生徒会室に来て、誰もいなくて暇つぶしに生徒会室を掃除してたり――――――」
「四季、今すぐ１１０番通報して。早急によ」

会長先輩、気持ちはわかりますがその能面顔はやめてください。
さっきまで、修羅場っぽかった雰囲気は消え椎名姉妹と先輩は定位置に戻り、杉崎をゴミでも見るような目で見ていた。
しかし、会長先輩が生徒会室を綺麗にしてたのか。いつも会長先輩が先にいると、やけにテーブルが綺麗だったりしてたが……納得した。
「まぁ、今言ったことは偶然その場に居合わせて確認できただけですけどね」
「とても信じられないんだけど……今すぐにでも杉崎に関する記憶を抹消したいくらいだし」
「そんな……会長。じゃあ、あの夜のことはなかったことにするというんですか……」
「な、なによそれ」
会長先輩が記憶を探るように引き下がる。
いや、会長先輩。どう考えても杉崎の妄想なんですから、そうやってありもしないことを考えたりするから弄くられるんじゃ……少しは自分の記憶に自信持ちましょうよ。
と思ったが、なんか面白くなりそうなのでみんなと同じように俺も傍観することにした。
「あの夜、会長、夢のなかで！何度も激しく俺を求めてきたじゃないですかっ！」
「やっぱ通報しましょう！犯罪者予備軍がここにいるわ！」

「酷い！俺の純情を弄ぶなんてっ！」
「むしろ私が弄ばれているんじゃないかしらっ！」
会長先輩が叫び疲れ、ぜぇぜぇと息をしながら着席する。小柄な会長は体力が少なく、今みたいにゴリ押し戦法なら口論で押しきれる。
「純情……？鍵が純情なら、世の中の大半の男は純情になるんじゃないか……」
杉崎には聞こえてなかったみたいだが、俺には聞こえた。
思春期の男子はそれなりに欲望を抱えてるとは思うが、杉崎みたいにオープンな奴はそうそういない。
自分を隠さず、本当の自分を見せるって点は評価できるが、真似したいとは思わん。
「キー君、私は別に貴方のこと嫌いではないけれど、もうちょっと誠実に立ちまわった方が利口だと思うわよ？ハーレムを作るにしても、それを宣言するんじゃなくて、むしろ誠実さで落としていくのが王道じゃないかしら？」
「う、ううむ…知弦さんの意見も一理ありますけど……しかし、どう取り繕っても、これが俺ですから！この欲望に満ちた姿が、本当の俺ですからっ！そして、性欲に忠実ッスから！」
ノートをぱたんと閉じた先輩が、ゆっくりと諭すように杉崎に語るが効果なし。自分を曲げるつもりはないらしい。

「芯からこってり腐りきってるなお前」
「一理どころか百理あるだろ」
「……杉崎先輩とお兄ちゃんを足して二で割ればいいんじゃないかな……」
深夏が冷たい目で杉崎を見て、真冬は結構酷いことを普通に言ってのけた。
やだ、この姉妹黒い。
だというのに、なんで杉崎は恍惚とした笑みを浮かべて震えてるんだ……女子陣が引いてるぞ。
……先輩、Ｓ気質だというのに杉崎見たいなＭ男はダメなのかね。ＳならＭと相性が良いと思ってたんだが……あ、ちなみに俺はどっちよりかと聞かれたらＳ寄りだろう。
どっちかと聞かれたらＳと答えるだけなので、普通なはず。
「ふふふ……これから、次々と美少女生徒会メンバーは俺の魔の手に落ちていくのさ……」
「魔の手とか自分で言い始めちゃいましたね……」
「ま、あんまりにデレないと、速やかに学園陵辱モノに早変わりするプランも――――――」
「清々しいほど外道だな、てめぇ」
到底、王道ギャルゲモノの主人公に言ってほしくない事を言う杉崎に苦笑する真冬と

若干怒りのメーターが溜まりつつある深夏。
「そして、杉崎はその女の子たちに報復されて天に召されていく……と。実際そういうジャンルのゲームの主人公って碌な最後を迎えないしな」
人差し指を立て、エロゲとかで良くある例えを出してみると思い当たる節があるみたいで、杉崎の顔が引きつっていく。
あとなぜか、他の生徒会メンバーからなんとも言えない目で見られてた。
……女子の前でこの手の話を普通にしてる俺も杉崎の悪エロ影響受けてきてるんじゃなかろうか……深夏の目が後で話があるとアイコンタクト送ってきてるし。
「お、俺を見くびるなよ。そうならない手は考えてある。全員の好感度をバランス良く上げるんじゃなくて、一人1話形式で上げていくんだよ」
「なに?」
震え声で話す杉崎に、片目が半眼になりなに言ってんだ的な表情になる深夏。
ＮｉｃｅＢｏａｔみたいに、好感度が高すぎてもあんな展開になるくらいだし、どういう風に上げてもあんま変わらんと思ったが、構わず杉崎は続ける。
「ギャルゲに限らず、学園ドラマでもそうだろう?教師は、一話で一生徒の悩みを聞いて解決し、徐々に溶け込んでいくんだ。そして、最終回ではクラスの生徒全員が生徒に感謝しまくるという、ある意味ハーレムエンド」

「学園ドラマの最終回をえらく汚(けが)された気分だぞおい」
「そうさな、まず割りと現時点で好意的な真冬ちゃんあたりを皮切りに、会長、深夏、そして知弦さんと徐々に何度が上がっていく感じで問題を解決していき、気付けばあら不思議、皆俺の虜に……」
「どうでもいいが、あたしが知弦さんより攻略しやすいと思われているのが、軽く癪だぞこら」
「逆に問題を解決できずに、ヒロインが転校しちゃったり、島流しされちゃったりするＥＮＤに向かうんじゃねーの？」
「やめろっ!!!誰も幸せにならない展開は俺は望んじゃいないんだっ!!」
「その前にキー君が己の欲望に負けて、警察のお世話になっちゃうんじゃないかしら」
「知弦さんまで!?」
「あれだ。悪友の覗きの誘いに断れず誘惑に負け、挙句の果てにヒロインたちにバレちまって説教で許されたりするが、お前の場合は問答無用で豚バコ行きだな」
「情状酌量の余地くらいあってもいいじゃねーか!?」
「あるわけねーだろんなもん」
「断言された!?」
　俺と先輩の言葉の暴力に杉崎が声を荒げてツッコミまくってた。

それと先輩から、『良い攻めっぷりよユー君』と喜んでいいのか正直良くわからんお褒めのアイコンタクトを頂いた。

「ま、真冬は一番最初にオトされちゃうのですか……」

先ほどの杉崎の攻略発言に、ぷるぷる震えている真冬。深夏ならば、怒りで震えているのだろうとわかるが真冬ならビビって震えているのがわかる。

どう考えても武者震いであったり、やり場のない怒りで震えているわけじゃない。てかそうじゃなきゃビビる。

「安心しろ真冬。あんな良くて悪役キャラ。ヒロインを一人に絞れなくて、ハーレムルートに逃げる優柔不断の甲斐性皆無のヘタレ童貞杉崎の手にかけさせはしねーよ」

「酷くね!?今までの罵詈雑言の中で一番酷い！俺お前にそんな悪いことしたっけ!?」

自覚なしかい。目の端に光る何かを溜めてるようだが、知らん。自分の胸に聞いてみやがれ。

言い知れぬ恐怖に震えている真冬の頭に手を置いて、そのままおでこ辺りまで持って行き、親指でおでこをなぞる。

そうすると、くすぐったそうにするがさっきまでの震えはなくなっていた。昔から、真冬がなにもない所で転んだりして泣きべそかいた時はこんな感じで泣き止ましたっけな……随分久しぶりに真冬の髪に触れたが、手触りがとんでもなく良かった。同じ人

間だというのに、性別が違うだけでこんなにも違うもんなんだな。
……なんて、端から見たら微笑ましそうなことをしていたら、どっからか突き刺さる視線が……
「四季～？神聖なる生徒会室で不純異性交遊はやめてくれる？」
「……仲が良いのは良いことだけど、少しは人目を気にするべきね」
「……」
真冬以外の女性陣から厳しいお言葉を頂きました。いや、深夏は何も言ってないけど。
何か言われるより、無言のほうが精神的にクルものがある。……俺なんか悪いことしたのかね。
「えへへ……ありがとっ、お兄ちゃん」
見るからにご機嫌ななめな３人とは反対に頬を染めて嬉しそうにする真冬。
うん、真冬には笑顔が一番似合う。真冬っていうか、女の子全員に当てはまるとは思うが。
なんて、注目を浴びていたら……

「本当の敵っていうのは身近にいるもんなんだ！」
イスが後ろに倒れるほどに勢い良く立ち上がった杉崎が会長先輩みたいなことを言い出した。
突然の杉崎の奇行に俺含め全員の視線が杉崎に行く。
「俺は美少女ハーレムを作る！」
が、宣言してることはいつもの内容なので、みんな「またか」と言わんばかりで見ていた。
「世の男どもが羨むくらいな、他のハーレムの主よりも凄い美少女ハーレムを作るんだ！」
「いや、そもそもハーレムを形成してるやつなんてそうそういないと思うが」
なぜか俺を見て言ってくるので思わず、ツッコんでしまった。
他のメンツも俺の発言に頷いていたが、杉崎の演説は続く。
「美少女を侍らし、いつか、あー美少女にも飽きたなって言えるとこまで上がってから、

妥協する」
「……山が高いのは良いことだろうが、言ってることは大分クズ発言してることに気付いてるか？」
「まぁ、キー君だし……でも、取り敢えず行くとこまで行ってみようってことね。いいんじゃないかしら。好きよそういうの」
「ハーレムはさておき、そのスタンスは悪くないな」
「そうですね……目標を掲げて頑張るというのはいいかもしれませんね」
ハーレムという点を除けば、杉崎の宣言は概ね好評化だったようだ。
かく言う俺もそういったハードルは高けりゃ高いほど飛び越えが良い的なのは嫌いじゃない。
あんまり高すぎるハードルは飛び越えられないかもしれんが、挑戦的なスタイルは良いことだろう。やらないで後悔するならやって後悔したほうがいいだろう。
珍しくまともなことを言った杉崎に皆感心していたのだが……
「そしてっ！至高のハーレムを作った暁には！お前のようなハーレム気取りの愚か者を跪かせてやる!!同じ道に２人以上の覇者なんていらぬ!!」
それも一瞬のことだった。すげぇ、上げたと思ったら、ほんの数秒で評価が下がるとは。

そしてツッコミ所が多すぎる。俺がいつお前みたいに女好き発言した？跪かせてどうすんだよ。

お前はどこの青い目のドラゴン好き社長だ。

みなが嘆息してる中、会長先輩はというと……

「えー、あんまり頑張るのはつかれるよぅ」

この会長先輩の堕落っぷりである。いやね、全力を出しすぎて破滅するのも良くはないだろうが、初っ端から手を抜くのもどうかと思うんですけど……

ぽりぽりと幸せそうにスナック菓子（先輩の）を頬張る会長先輩を見てるとこの人大丈夫なんだろうか……と思う反面、この人ならなんとかなるだろうと思う自分がいる。

この学園の生徒会長で満足してそうな人だけど……なんかこの人からは人を焚きつけるような何かがあるんだろうな。仮に現世代の生徒会長が人格破綻者だったら、俺自身生徒会に入るのを断ってただろうしな。

「というわけで、今日は解散しますかぁ」

先輩のお菓子を食べ終え、満足そうにし今日の活動を終えると宣言した。

全員が会長先輩をダメ人間だなと思っていたみたいだったが、まぁ……うん。

そんなこんなで、碧陽学園生徒会は今日も集まり、無駄な事を話し、終わりましたと

さ。

……仕事もしてないけどまぁ、いつものことか。

お仕事しないで駄弁る生徒会【裏】

「お兄ちゃん遅いね……まだ杉崎先輩と残って頑張ってるのかな」

校門近くの壁に背を預け、あたしの隣で小説を読んでいるのはあたしの大切な妹の真冬。贔屓目で見なくても真冬はかわいい。あたしみたいなガサツで男勝りな女なんかよりも女の子らしい。

あ、今回の話は議事録じゃないみたいだから視点がユウや鍵じゃないんだな。今後もこうなるかはわからないけど、今回はあたし視点か。

「いつもだったら、このくらいの時間に来てるから、今日は長引いてるのかもな」

真冬と同じように壁に背を預けたまま、あたしは携帯で時間を確認する。

あの後、鍵とユウはいつものように生徒会室に残り雑務を片している。去年まではあたしたちで全ての雑務をやっていたが、今年からはあいつらだけでやっている。

鍵曰く、「美少女は早く帰るべき!生徒会の仕事は俺にまかせなっ」と言って強引に決められた。ユウはユウで「んじゃ、俺は美少女じゃないからやることはやるわ」と最初は鍵がこれを断り、一人でやろうとしていたみたいだが、ああ見えて世話焼きのユウだ。鍵だけに面倒事を押し付けたくなかったんだろうな。

はぁ……本当はあたしも力づくで手伝おうとしたんだけど、鍵は美少女美少女とふざけた感じで相手にしてくんねーし、ユウはユウで遅くなる前にさっさと帰れなんてシッシと追い払いやがったしな……それでのこのこ帰るあたしもあたしなんだろうけどさ。

「やっぱり、お兄ちゃんと杉崎先輩だけに生徒会の仕事をやってもらうのは悪い気がするなぁ……今からでも戻って手伝いに……」

「諦めろ真冬。その事についてはあいつら一歩も譲ろうとしないからな。あたしたちがなに言っても無駄だぞ」

「うぅ……真冬たちはそんなに頼りにならないのかなぁ……真冬はお兄ちゃんたちとお仕事したいのに……」

やっぱり。真冬もあたしとおんなじことを思ってたんだな。

あいつら、あたしらに気を遣ってるのはわかるんだが、あまり度がすぎると真冬みたいに落ち込んだりするのをわかってないのかもな。

しょぼんと肩を落とし、読んでいた本を下げてる真冬なんて見たくない。

……ったく、ユウのやつめあたしの妹をこんな顔させるなんていい度胸だ。せめてものの足掻きで今日もあたしたちは待ち続けてやるんだからな！べ、別にお前と一緒に帰りたくて待ってるわけじゃないぞ？ただ、同じマンションに住んでるわけで……帰り道が同じだし、鍵とは帰り道が反対で一人寂しく帰ることになるお前がかわいそうだから

待ってるだけなんだからな！勘違いすんなよ!!……なに言ってんだろあたしは。
「そんな顔すんなって。ユウが見たら心配するだろ？」
「でも……」
今日生徒会室でユウが真冬にやったようにあたしも真冬の頭に手を置いて、不安を取り除けるようにやってみる。
それでもまだ気落ちする真冬に、あたしは言葉を続ける。
「別にあたしたちが使えないからって仕事をさせてないわけじゃないんだしさ。ユウが言ってたけど、本当にどうしようもない量だったら手伝ってもらうって言ってたしさ」
「そうなんだ……うん、その時にお兄ちゃんたちが吃驚するくらい頑張れば、真冬たちに仕事を頼んでくるようになるよね！」
お、元気を取り戻した見たいだな。前に出てくるくると回る真冬。さっきまで、真冬が犬だったら尻尾が垂れ下がるほどに落ち込んでいたが、今となっては扇風機みたいに尻尾が回転し出しそうな程元気が出たようだ。
「あ！お姉ちゃん、お兄ちゃん来たみたいだよ！」
真冬の言葉に昇降口の方を見てみると、ヘッドホンを付けて文庫本か何かかはわからないが文庫本サイズの本を片手にこっちへ向かってきていた。
「まったく、あいつは……本を読んでなきゃ落ちつかないのか」

「お兄ちゃんらしいけどね」

あたしの言葉に苦笑し同意する真冬。今も昔も変わらず本の虫だな、ユウは。

あたしたちがいくら注意しても一向にやめる気配がないし、困ったことにあいつは本を読みながら歩いているってのに、通行人に一度もぶつかったことがないうえに、交通事故に巻き込まれたこともない。いや、それは良いことだけどさ。

いつ事故とかに巻き込まれるかわからないわけで。今までは偶々起きてないだけかもしれないし……ユウが事故に巻き込まれて、死んだりしたら……いや、やめよう。本当に起こったりしたら笑えない。考えただけで胸が苦しくなる。

あいつめ、この世の中に０と１００パーセントはないとか言っておきながら、自分はそれかよ。お前が事故る可能性だって０じゃないってのに、俺は大丈夫だとか言い張るしよ。いったいその根拠はどっから湧いてくんだか。

けれども、あたしは毎回決まって言ってやるんだ。ユウも毎回決まった返事をしてくる。

あいつがやめない限りは何度だって言ってやるんだからなっ！覚悟しろよな！

「んじゃ、鍵の返却は任せた……あ、ギャグじゃないぞ?」
「わかってるっつの。文章じゃわからないだろうけど、実際はちゃんとかぎって言ってんだからよ」
メタ発言乙。最後に帰る人は生徒会室の鍵を職員室にいる教師に返却しないといけないルールがある。
基本俺か杉崎が仕事で残ってるため、返す人なんて俺らしかいないが。
「それじゃ、また明日なー」
「ああ。お前が今日も無事で明日の日を拝めたらの話だけどな」
「物騒なこと仰らないでくださる!?」
「え……あ、そっか。お前は知らないのか……」
「え、あの優さん?なんでそんなに悲痛めいた表情を?」

「……杉崎。今日の晩飯は豪勢にしとけよ」
「最後の晩餐!?俺の命は明日の朝飯までなのか!?」
「本人は知らなくても良いことってあるしな……さよなら杉崎」
「そのさよならは別れ際のあいさつの意味だよな？現世にさよならとかそういったことじゃないよな!?」
杉崎弄りも飽きたので、そのまま「おいいいいいいいいいいい！結局俺はどうなんの!?めちゃくちゃ気になんだろうがあああああああああああ!!!」廊下で叫ぶ杉崎を置いて下駄箱に向かう。
ローファーに履き替え、鞄からヘッドホン&ウォー〇マンと冒険小説を取り出す。音楽を聞きながら本を読むスタイル。褒められた事じゃないが、時間というのは有限なのだ。1日という限られた時間の中で如何に有意義に過ごすか……それに俺ならば他の人にぶつかることもなければ、信号の所で止まることも可能である。
なんていうのか、自分に危機が迫ってきたら本能が俺に告げてくれるみたいに感覚でわかるのだ。
今回の冒険小説はまだ無名の新人作家が書いたものだ。ネットで調べたら、レビューとか感想などがほとんどなかったので、読み終わったら軽く適当なサイトに感想でも書くとするか。

「まーた歩きながら本読んでやがんのか。危ないからやめろっていつも言ってるだろ」
読み始めてから一分も経ってないというのに、校門前まで来たら椎名姉妹が待っていたようだ。
俺が読み歩きしていると、毎回深夏に止められている。真冬は強く言ってこないが、危ないからやめたほうがいいと遠回しに言ってくる。
このまま読み続けていても、俺に読まさせないために2人が話しかけまくってくるので言われたら読むのをやめる。
ヘッドホンを外し、小説を鞄に突っ込みながらお決まりの台詞を言い放つ。
「俺だから大丈夫だっての」
「絶対、ではないだろ？」
「９９．９９９９９９％だな」
「それもう１００％じゃないの……？」
右側に深夏。左側に真冬という陣形で俺たちは同じ通学路を歩く。
毎回ではないが、俺が雑務で杉崎と残ってる時2人がこうやって待ってくれてる時がある。
帰る時間が遅くなるから、俺と杉崎で雑務をやってるというのに待っていたら意味が

無いんだが……

「いや、１００％ではない。この世に０パーと１００パーってのは存在しない」

「だったら、歩きながら本読むのやめろよ。その理論ならお前が事故ったりする可能性も０じゃないんだろ？」

「０．０００００１％くらいはあるんじゃないか？まぁ、俺だからそんなことはありえないが」

「お兄ちゃん、言ってることが矛盾してるよ……」

「それよりも、二人ともずっとあそこで突っ立ってたのか？俺が遅くなることは確定してんだから、気にしないで先帰っていいんだぞ？」

「ずっと校門前にいたわけじゃないぞ？真冬と一緒に図書室で時間潰してたしな」

「それにお兄ちゃんは遅い時間に女の子だけで帰るのがよくないんでしょ？この時間でもお兄ちゃんと一緒なら問題ないんだし、真冬たちはお兄ちゃんと一緒に帰りたいんです」

……とまぁ、毎回こういう感じなやり取りをし。２人が俺を待ってくれてることは少なくない。

どうせ、帰り道も一緒だから２人がいいなら別にいいんだが。

だが、毎回気になるのは２人が校内で時間潰してるというのに、こう毎回俺が雑務が

終わった時間にタイミング良く校門前にスタンバってるのはどういうことなんだろうか……偶然にしては出来過ぎてる気がする。

……そういや、雑務が終わった時毎度杉崎が携帯を弄っていたような……まさか……な？

「おい、真冬！その言い方じゃあたしまでユウと一緒に帰りたいみたいじゃないか！」

「もうっ、お姉ちゃんは素直じゃないんだから……お兄ちゃん、お姉ちゃんはこう言ってるけど図書室で真冬が先に帰ってもいいんだよ？って言ったらね――――――「真冬っ!?」これ以上はお姉ちゃんが怒っちゃうからやめようかな」

「もう遅いよ！ユ、ユウっ！なんでそんなニヤけていんだよ!!真冬もわかってますみたいな風に……！」

ま……本読んで帰るのもいいんだが、こうやってこの2人と駄弁って帰るのも悪くないんだよな。

恥ずかしいから言わんけど。

「ただいまー」

自宅のマンションにつき、椎名姉妹たちも隣の２０４号室に入っていった。俺の所は２０５号室。

一度自室に鞄を置き、リビングの方に向かう。玄関に母さんの外靴が置いてあったから、今日はもう仕事が終わってるみたいだから、いるとは思うんだが。

「母さんただいｍ――――」

「ユウちゃんおかえり！さっ、香澄ちゃんたちの所でご飯食べに行くわよ！」

「それで、深夏ったらね『おねえちゃんだから、まふゆにゆずってあげるんだ！』ってお姉ちゃんぶってかわいいのなんの！」
「甘いわね！私のユウちゃんだって負けてないんだから。『しょうらいはおかあさんのおよめさんになるんだ～♪』って毎日私に言ってきて、もうキュン死にするくらいだったんだから！」
「いつの頃の話をしてんだよ……」
「待つんだ母さん。俺はそんなこと言った覚えはないぞ。過去を捏造すんなや」
「いや、お兄ちゃん。まずお嫁さん発言の方にツッコミいれようよ」
　気がついたら、母さんに連行され……椎名家で夕食を取っていましたとさ。
　椎名香澄（椎名母）さんお手製のメガウマ料理をいただき、５人で談笑していたんだが……香澄さん（年上なのであんま名前で呼びたくないのだが、この人は例外）とうちの母（四季美優）が酒盛りし始め……酔いが回り始めて来た頃、謎の娘息子自慢をし始めたとさ。
　椎名家と一緒にこうやって、飯を食べる頻度は結構多い。香澄さんは専業主婦だが、母さんは普通に働いてるため、翌日が休みでない限り酒を呑むことはほとんどない。なので、明日母さんは公休らしい。

「この調子だと、酔い潰れるまで続きそうだな」
「だなぁ……美優さんは今日うちに泊まることでいいか？」
「そうしてくれると助かる。元々そのつもりだったとは思うけどな……」
俺たちは少し離れた所にあるソファーに腰をかけ、お互いの母を見る。
俺の母さんは小さい。俺が小学5年生くらいの頃にはもう背を抜かしていたほどにだ。漆黒のウェーブがかかった緩やかな髪に、少々垂れ目気味な目。いわゆるロリ体型……って感じだな。
あと若い。もう〇〇歳だってのに、若い。下手したら、俺の隣を歩いていると妹だと間違えられるくらいにだ。
外見は真冬。中身は深夏より。香澄さんはそんな感じだ。真冬みたいに頭部にリボンはつけてないが、その長い髪はリボンで結っている。サバサバとした性格で、俺が深夏と真冬のお母さんと長ったらしい名前で呼んでいたら、両頬を引っ張って「香澄さんと呼びなさい？」と強要されたっけな……何か素直に従うのもシャクだと当初捻くれていた俺は香澄おばさんと呼んでやった。その代償は山のようなタンコブだったわけだが……
「真冬たちは明日も学校ですけど、この後お兄ちゃんはどうするの？」
隣に腰掛けてる真冬が小首を傾げ聞いてきた。壁に掛けてある時計を確認してみる

と時刻は２１：００を回っていた。時間的には１、２時間ちょっとはなんかできるってとこか。

「静かにどくｓ「一人でなにかするってのはナシな」……」

真冬とは反対側、要するに俺の右隣にいる深夏に先手を取られてしまった。

いやさ、正面にテーブルを挟んで置いてあるソファーがあるんだから、そっちに座ってもいいんだぞ？別に逃げなんてしないし。

「んなこと言われても特別したいことないしな」

「だからといって、一人で本を読むのはどうかと思うんだけど……」

「２人はなんかやりたいもんとかあんの？なかったら帰って本読みたいんだが」

「ちったぁ本から離れろっての……そうだなぁ、テニスなんてどうだ？」

「どうだ？じゃねーよ。こんな時間からするもんじゃねーだろ。だいたい、近くにテニスコートねーぞ」

「えぇー！やっと百八式まで波動球習得したのに……」

「色々と言いたいことはあるんだが、お前はそれを俺にぶっ放すつもりか」

「ユウなら大丈夫だって！ちゃんと加減はするし」

「その謎の根拠が良くわからん……そんなテニスしてない技じゃなくて、もっとタンホ○ザーサーブとか麒○落としとか安全そうなやつにしとけよ」

「お兄ちゃん？そもそもあの世界観のテニスを現実で再現するのは至難の業なんだし、そう簡単に言うのは……」
「百八式まで習得したっつー人間離れした奴なら朝飯前だろ」
「うぅ……否定出来ません……」
「人のことを化物みたいに……あれくらい練習すりゃ誰でもできるだろ！」
「お前は全国のテニスプレイヤーに焼き土下座してこい」
いつから、深夏はこう人間と化物の境目にいるくらいの身体能力を身につけたのだろうか……昔はもっと人間してたはずだ。
空手の練習！だとかいって、１０枚瓦割りしたり、真冬を虐めてる男子たちに獅○連弾とかくらわせてトラウマ植え付けたり、深夏にこれくらいはできるようになれ！って言われて、俺に気○斬を強引に習得させたり……ってちょっと待て。考えてみたら、昔から変な素質あったじゃねーか……幼馴染がふとしたことで殺人犯にならないように祈っておこう……
「とにかくだ、テニスはしない。するんだったら明日辺り、杉崎にでも披露してやれ」
躊躇なく杉崎を生け贄に捧げたが、あいつならきっと美少女相手なら喜ぶだろう。
真冬から、呆れた様子で見てきているが気にしない。俺は危機を回避できる。あいつは美少女と汗を流せて（意味深）嬉しい。深夏は実験台……もとい、練習相手が出来て

嬉しい。うん、誰も不幸にならない。完璧だ。
「……あたしはユウとテニスがしたいんだけど」
不服そうに明後日の方向を向いて呟く深夏だったが、残念聞こえてました。
こいつはそんなに俺を場外に吹き飛ばしたいのだろうか？知らぬ間に幼馴染がバイオレンスになってあたしゃ悲しいよ。
「えっと、それじゃあ3人でスマ〇ラでもやらない？」
「いいぞ。今からテニスするよりかはよっぽどいいわ」
「やった！はやく真冬の部屋にいこっ」
そういうと、ぴょんとソファーから立ち上がって座ってる俺の手を引いてくる真冬。小さい子供が明日遊園地に行くのを待ちきれずに親に急かす……今の真冬はそんな感じだな。かわいらしいその笑顔を見ていると、思わず頬が緩んでしまうのは俺にブラコンの素質があるからかもしれん。
いや、真冬は兄妹の関係ではないんだが……
「わかった、わかった。わあったから腕を引っ張んな」
が、真冬に言っても離してくれず、俺はそのまま真冬の部屋に引きずり込まれていった……

「くぅぅっ！絶対ボコボコにしてやるからなっ！」

……リビングから三下臭い台詞をはいて、ドスドスと怒りを露わにしてついてくる深夏がいましたよっと。

ここからは3人が仲良く?ス〇ブラ（W〇i）をプレイしている様子をごらんください。

「おい、なんでチーム戦でもないのに俺ばっか狙ってくんだよ」（操作キャラ、イケメン剣士）
「そりゃぁ、この中で一番やっかいだからだよ！早く星になれ!!」（操作キャラ、キノコの国のお姫様）
「なんでお兄ちゃんはそんなにカウンターが上手いの!?失敗してるの見たことがないんだけど！」（操作キャラ、電気ネズミ）
「お前らの行動パターンがわかりやすいんだよ、はい、ドーン」
「ええ!?その状況でメテオ!?」
「あぁ！コンピューターめ！邪魔すんなよなっ、ユウをぶっ飛ばせないじゃねーか！」
「それが深夏の最後の台詞だったとさ」

「なっ！ひ、卑怯だぞ！戦ってる最中に攻撃すんなんて！」
「それチーム戦でもないのに、二人がかりでやってくる奴が言えんの？」
「（ふっふっふ、お姉ちゃんとＣＰＵと争ってる今がチャンスです！真冬は学習する子なのです！）」
「バレてないと思った？残念、バレバレでした」
「あぁっ!?そんな動物愛護団体さんたちが見たら怒りそうな、一方的な攻撃を!?」
ゲームの実力は優〉〉〉真冬〉〉〉〉〉ＣＰＵ〉深夏でしたとさ。

「さーて、そろそろ寝るかね」

あの後、集中的に俺ばっか狙ってくる姉妹を完膚なきまでに叩きのめし、俺は自室に戻っていた。

元々、俺がゲームをやり始めたのって真冬の影響だから、そこまで上手くはないはずなんだが素質があったのかはしらんが、だいたいパーティーゲームとか格ゲーとかは真冬よりも勝率が高い。

あいつは休日だと、一日中自宅に引き篭もってゲーム三昧する廃人だからなぁ……それに付き合う俺も俺なんだが。

深夏は俺達と付き合ってるせいで、普通の人よりは上手いんだが俺と真冬には遠く及ばない。

あと、あいつはあんな性格のせいか、使用するキャラは女性キャラが多い。意識して

るのか、それとも無意識なのかは知らんが少しでも女らしくしたいっていう精神面が知らず知らずに前に出てるのかもな。

母さんは椎名家でぐーすか寝てるため置いてきた。明日の昼くらいには起きてこっちに戻るだろう。明日の準備もできたし、とっとと寝るとするか……

なんてベッドに潜り込もうとしたら

着メロ『Ｔｒｅａｓｕｒｅ』

俺の携帯からメールの着メロが鳴った。この着メロを設定している送信者は生徒会メンバーなので、寝る前に確認する。ったく、寝ようとしたとこだってのに誰だよ……

差出人　知弦先輩

件名　なし

「……先輩？」

先輩からだった。メールボックスを開いた時点ではどんな内容かはわからない。だって、何も書かれてないし。

ってことは本文を打つ前にブランクを打って、俺がメールを開くように仕向けたのだ

ろうか。

……あの人はなんでこうめんどくさいことをするのだろう。

それと、俺が先輩のことを知弦先輩で登録してることについてだが……最初先輩とメアドを交換した時、俺は先輩と登録したはずだった。

だが、それがいつだったか先輩にバレ……変えられた。「それだと、どの先輩かわからないでしょ？」と目にも留まらぬ速さで俺の携帯を奪い、もっともらしいことをいわれた。

……パスコードも設定していたはずなのに、なんであっさりと解除されたのだろうか……聞こうとしたんだが、聞きたい？と怪しい笑みを浮かべていたので……やめた。聞いたらなんか死ぬほど後悔する気がしたからだ。

取り敢えず、メール開封っと

「……」

即座に削除。出合い系サイトの登録メールとか……送り先間違えてるんじゃなかろうか。

よし、寝よう。

「……」

今度はＬＩＮＥの通知音。このタイミングだと先輩からか……？

ちづちづ
メール、最後まで内容確認せずに削除するのはよくないわよ？
「いや……なんでバレてるんですかねぇ」
俺の周辺に盗聴器でも仕掛けられてんじゃなかろうか……相手が先輩だからってことで納得するしかないが。
ポチポチと適当に返事を返す。
シキ
だったら、出合い系登録サイトを送ってこないでください
ちづちづ
あら？お気に召さなかった？今夜のユー君のオカズを考えて上げたのだけれど
「……なんつー気の回しをしているんだ」
シキ
そういうのは杉崎にでもしてあげてください
ちづちづ
キー君はわかりやすい反応しちゃうからつまらないわ。ユー君みたいにもっとからかいのある反応をしてくれないと

シキ
そろそろ寝ますね。おやすみなさい、紅葉さん
ちづちづ
まって、文章越しでも苗字読みはグサっとくるからやめて。そこは知弦って呼び捨てにしてくれないと……
「なに自分の欲望をサラッと言ってんだ……」
ちづちづ
……そうね、私が悪かったわ。私の気の回し方が良くなかったのね

さっきから、俺が返信する度に即座に返事をしてきた先輩だが、これを最後に数分経っても反応はなかった。
ひょっとして、風呂にでも行って長時間反応がなくなるんじゃないかと思って、俺は携帯を机に置いてベッドに戻――――
「……あ、返事きた」
文章が送られて来たのかと思ったが、なんか画像が貼られているみたいだ。
取り敢えずなにが送られて来たのか見てみて――――
「ぶっ!?」

思わず吹き出してしまった。ツバが携帯にかかってしまうが、コレはしょうがない。だって……貼り付けられた画像は黒のアダルティーなパンツだったんだから

シキ

ちょっと!?なんてもん送ってんですか貴方は!?

ちづちづ

どう?これなら興奮してくれた?もしかしたら、ユー君はああいうのより下着のほうが興味あるんじゃないかと思って

シキ

そんな考察も気の回し方もいりませんから!?痴女ですか貴方は!!

ちづちづ

むっ、そう思われるのは侵害ね。私がこういうことを他の人にもすると思ってるのかしら?

シキ

え?す、すみません。ちょっと言い過ぎました……

「……杉崎にも送ってんじゃないかなぁ」

こう返したのはいいが、若干そう思ってしまった。ごめんなさい、先輩

ちづちづ

なーんて、冗談よ。ユー君はほんと優しい子ね

「……そんなこっ恥ずかしいこと良く書けるなぁ……」

顔が暑くなってくるのがわかる。あーもうっ！寝る寸前だってのに、ドキドキして寝られなくなったらどうしてくれんすか……

携帯を閉じて、今度こそ寝ようとしたらまた先輩から通知が来て……

ちづちづ
アレはアカちゃんのパンツだしね

また返信するハメになった。
シキ

あれ会長先輩のだったんですか!?自分のじゃなくて!?
ちづちづ
あら?ひょっとして私のほうが良かった?なら、今から脱いで送って上げるわね
シキ
いやいいですから!!!じゃなくて、何勝手に会長先輩のを送ってるんです!?
ちづちづ
まったく、アカちゃんの癖にあんな大人っぽい下着を買うなんて……思わず、持って来ちゃったじゃない
シキ
無断で持ってきたんですか!?
ちづちづ
あんなの穿いて、他の得体のしれない人に見られたら大変じゃない
シキ
窃盗を分けの分からない言い分で通そうとしないでください！

なんでこの先輩はこうもフリーダムなのだろうか……結局この日俺はこんな感じで先輩が飽きるまで弄くられていたのだった……

しなくてもいいのにラジオ放送しちゃう生徒会1

今日も今日とて、生徒会室にやってきたのは良いものの特にすることはなかったので、適当に買い漁った本でも読もうとしたが、深夏にぶん取られた。「返して欲しければ、あたしを倒してみるんだな！」とモロ悪役の台詞を吐き、野球盤を持参し勝負を挑んできたので、相手をしていたら……

「他人との触れ合いやぶつかり合いがあってこそ、人は成長していくのよ！」

会長先輩が例のごとく、どっかの本の受け売りを語り出していた。

誰もが会長先輩の言葉がどういうことか、わからなかったようで皆固まる。深夏も会長先輩の方を見ていたので、俺はその隙に投球をする。はい、見逃し三振と。

「なんですか。それ？」

みんなの代表として、杉崎が会長先輩に聞き返していた。会長先輩はまってましたと言わんばかりに、不敵に笑みを浮かべ、背後のホワイトボードに文字を書き込んでバシッと叩く。

取り敢えず、これで俺の勝利なので深夏から本を取り返す。

「っておい！何勝手に続きを始めてやがんだ！」

「勝負の最中によそ見してるほうが悪い」
「真剣勝負だってのになんて卑怯な……！」
「人質……いや、本質か？を取っておいて、よくもまぁ、そんなことが言えんな」
「はい、そこの幼馴染2人！話を聞きなさい!!」
　会長先輩に睨まれ、「ユウのせいで会長さんに目を付けられたじゃねーか…」と俺に非難の目を向け、野球盤を片付ける深夏。そもそもあなたが俺の本をぶん取らなきゃ良かった話だと思うんだが。
「ラジオ放送？」
　ホワイトボードを見てみると、可愛らしい小さい字でそう書かれていた。他のメンツは不思議そうな顔をしていたが……俺にはなんとなくわかってしまった。
　嫌な予感がビンビンと感じてしまっているが、会長先輩は胸を張ったまま続ける。
「そう！これから生徒会でラジオをやろうと思うの！」
「ら、ラジオって……」
　やっぱりな。会長先輩の発言内容は考えてることをそのまま言うことがほとんどだしな。
　こういったことが苦手である真冬は恐る恐ると会長先輩に尋ねる。
「あの……ラジオですか？音楽かけたり、喋ったりする」

他に何があるのだというのか。そんなことも聞いてしまうほど、動揺しまくってるのがわかる。

「そうよ。あの伸ばしたくなるアンテナがついてる、あのラジオよ」

「あ、それは真冬もわかります。無意味に触りたく……じゃないです！それってなんで生徒会がするんですか？そういうのは放送部とかの仕事だと真冬は思っていたのですが……」

あぁ、真冬のやつ左右に揺らしまくって遊んでたりしてたんだっけ。それで、ポキッと折ったことがあって両親に怒られたんだっけな……当時、壊した真冬が俺と深夏に泣きついてきて3人で椎名父に謝ったっけな……親父さんは正直に言ったってことで笑って許してくれたっけな……

同じことを考えていたのか、深夏と目が合うとお互い苦笑いを浮かべた。

「何言っているの！生徒会って、生徒をまとめる立場にある組織よ！政見放送みたいなものもたまにはしないといけないわ！」

「いや、会長。普通の学校はそんなことしませんよ？」

「ここは私の学園！私がルール！私が白って言ったら白なのよ!!」

「なんつー自分勝手な生徒会長なんだ！」

「そもそも、会長さんが通ってる学園であって、会長さんのじゃないだろ……」
暴走しつつある会長先輩に副会長組がツッコミを入れるが、会長さんの勢いは依然として変わらない。
「それにしても、政見放送なんて言葉よく知ってたわね。アカちゃん、よしよし、いい子いい子」
先輩が会長先輩の頭を撫でていた。子供をあやすようなその光景はとても同学年だとは思えなかった。
普通に目を細めてて気持ちよさそうにしていたが、我を取り戻した会長先輩は「うがー！」と声を上げ、先輩の手を払いのけていた。
「政見放送ぐらい知ってるわよ！子供扱いしないで」
「撫でられて、気持ちよさそうにしてた人がそれを言いますか……」
「べ、別に気持ちよくなんてなかったし！少し、眠たくなっちゃっただけだし！」
「会長。自爆していますよ」
「アカちゃんも成長してるのね……嬉しいわ。……あ、そういえば昨日、高視聴クイズ番組で政見放送をテーマに問題が出てたりしてたけど……いえ、なんでもないわ」
「……と、とにかく政見放送よ！」
あぁ、あの番組か。俺は見てなかったが、母さんが見ていたっけな。

で、案の定ラジオ放送は思い付き&番組の影響を受けたらしい。小学生の男子とかが、アニメとかなんかの必殺技を見て、真似するやつと同じだ。

「まぁ、文句言ってもどうせやるんだろうけどよ……でも、なんでラジオなんだ？映像のほうがいいんじゃねーの？」

この状況をほぼ受け入れつつある深夏が嘆息混じりに発言した。たしかに、どう足掻いてもラジオを放送する流れは覆らないだろう。

「それも考えたけど、放送部に押しかけたら、「今渡せる機材はこれしか……」と泣かれたからラジオなの」

そう言いながら、準備を始める会長先輩。設備やら配線関係もそれなりにしっかりしてるし、昨日の今日でこれほどの準備をさせたのか……律儀に提供する放送部も放送部だが、人を動かす力を持つ会長先輩も会長先輩だろう。

もうちょっと考えて行動してください。

「か、完全に準備されちゃってます……」

あからさまに元気をなくしていた真冬。どうにかできないかとこちらを縋るように見てきていた。

真冬だけじゃない、深夏も先輩も杉崎もなんとかできねーかと目線が訴えてきていた。

……お前ら、雑務だからって会長先輩の子守をやる義務なんてないんだからな……

「会長先輩。いくら生徒会でも、学園側の許可無く放送するのはまずいかと」

そんなことを思いつつも、結局は動いてしまう俺。皆が期待の視線を送ってくる中、俺はなんとか会長先輩が考えなおすよう会話を繰り広げていく。

「だいじょーぶよ四季！そこんとこも放送部がやってくれるって！」

「なんでもかんでも言うこと聞きすぎだろ放送部……素人が放送なんてしてもグダグダになるだけだと思いますよ？」

「ふふーん、心配はいらないわ！私達って一応人気投票で選ばれたび、美少女……でしょ？」

「……恥ずかしいなら自分で言わなくてもいいんですよ？」

「う、うるさい！美少女に分類される私達がてきとーに集まって喋れば、みんな大満足のはずよ」

「そんな関係者やパーソナリティに喧嘩売る発言を……だいたい、いくら適当って言っても無計画でやるもんじゃ……」

「抜かりはないわ！この私が昨日三日三晩、寝る間も惜しんで計画を立てたわ！」

「昨日作ったのに、三日三晩とは……どれどれ？」

得意気にＡ４サイズの紙を付き出してくる会長先輩。嘆息しつつ、会長先輩の方まで

行きスケジュール表？っぽいのを受け取って確認する。
「……意外と、しっかり組み立てられていますね」
なんか、ツッコミ入れたくなる項目がいくつかあったが今は気にしないことにする。用紙を返却すると会長先輩はふふーんと満足気に頷く。
「でしょ！後は可愛い声でキャピキャピ喋りあってれば、男性リスナーなんてコロリと騙されるはずよ」
「杉崎以外の全男子に謝ってください」
「おい！なんで俺は省かれてるんだ！たしかに、美少女が甘ったるい声で話し合ってれば、興奮して夜も眠れなくなるけどな！」
「そのままお前は妄想を抱いて溺死しろ」
「だが断る！俺は生の美少女に囲まれて、たくさんの子供達と美少女に看取られて老衰で死ぬんだ！」
「……で、会長先輩？放送は決定事項なんですよね？」
「もちろんやるよ！ラジオっていっても、いつも通りに喋ればいいんだから。あ、でも杉崎はあんまり喋らないでね。杉崎は存在自体が放送コードに引っかかっているから」
「ひでぇ!?」
「鍵。あんな発言してる人間が、ラジオでまともなこと喋ると思わんだろ……」

結局、俺の説得は失敗してしまいましたとさ。皆に力及ばずすまんとアイコンタクト送ると…先輩はユー君はよくやったわとさほど気にしてないようで、真冬は失敗したらフォローお願い……と残念そうにしながらも、まだ頼りにしていてくれてるようだ。

深夏はどうせやるなら頑張ろうぜ！と不敵な笑みを浮かべていた。

杉崎は絶対発言しまくってやる！と目が燃えていた。

「逆に四季は発言していきなさいよ？ラジオの途中で本を読んだりするなんて言語道断なんだから！」

「……前向きに検討します」

「お兄ちゃん……その言葉ほど信じられない発言はないよ？」

考えてはやる。だが実行するとは言ってない。そういうことだからな。

改めて、他のメンツを見渡すとなんやかんやでこの状況を受け入れているみたいだった。

杉崎はこれが生放送ではなく、録音放送であったことに心底安堵し、やるからにはやってやるかと意気込んでいるみたいだ。

先輩もやると決めたらやるタイプなので、咳払いをし喉の調子を確かめていた。

深夏に至っては腕を組んで堂々とイスにふんぞり返ってるし……まぁ、昔から本番強いというか、緊張にはめっぽう強いからな。人前で話すことに慣れてるあいつならラジオ放送くらいなんてことないだろう。

唯一このメンツで消極的なのが真冬だけか。肩を落とし、憂鬱そうな表情を浮かべ、マイクをつついている。

なんだかんだで、本当に嫌なことはやんわりと断ったりするので、真冬も本気で嫌というわけではないのだろう。

正直、真冬よりもラジオ放送なんてやりたくもないんだが、俺一人が駄々こねてもしゃーないし……はぁ、覚悟決めるか。

「さぁ！始めるわよ!!」

★★★　ＯＮ　ＡＩＲ　★★★

ここからは原作同様台本形式で進行させていただきます。

会長「桜野くりむの！オールナイト全時空！」
杉崎「放送範囲でけぇ!!」
四季「ＩＹＡＨＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ!!!!」
杉崎「!?ちょ、急にどうした!?」
四季「いや、こういうのははじめが肝心って言うじゃん？テンション高めでいこうかと思いまして……」
杉崎「テンション高いっていうか別人かと思ったぞ！どっからさっきの声を出したんだよ!?」
四季「あ、スーパーハイテンションモードもう終わったからあとよろしく」
会長「テンションの下がりはやっ！こらっ！本読もうとするな！私達のラジオ放送はまだ始まったばっかりよ！」
杉崎「打ち切りフラグ……！」

♪ＯＰ曲『Ｔｒｅａｓｕｒｅ』♪

会長「さぁ、始まりました。桜野くりむのオールナイト全時空！」
知弦「夜じゃないけどね」
会長「細かいことは気にしないでいいの！この番組は富士見書房と小説投稿サイトハーメルンの提供でお送りします」
深夏「どうしたんだ富士見書房にハーメルン…無駄な投資も甚だしいな、おい」
杉崎「こんな二次創作の一つにハーメルンがスポンサーになるわけないだろ……」
会長「まぁ、ギャラも０円だし、機材も放送枠にもお金かかってないから、スポンサーにしてもらうことは何もないんだけどね」
真冬「じゃぁなんで提供を読んだんですか……」
会長「それっぽいじゃない。うん、今のところとてもラジオっぽいわ」
四季「その一言がなければとてもそれっぽかった」
真冬「ラジオってこんなグダグダな感じでいいのかな……とても流していいものじゃないと思います……」
会長「こら！真冬ちゃん！そんなテンションじゃだめよ！リスナーはもっとこう、元

気に――――」
四季「イエ゛アアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」
会長「ちょっと!?さっきからどうしたの!?急に杉崎みたいに奇声上げないでよ!!」
杉崎「待ってください！会長それどういう意味ですか!?」
知弦「そうね、キー君はもっと良い悲鳴を上げるものね」
杉崎「上げませんから!!少なくとも、突拍子もなく叫ぶことはありませんって！」
真冬「それって、叫べる状況なら叫ぶってことですか……」
四季「いえ、元気にしろってことみたいなので、ちょっと真冬にお手本をですね」
会長「アンタのは元気じゃなくて、ただ叫んでるだけ！次から叫ぶの禁止！次変な奇声上げたら、永久追放だからね！」
四季「あ、なんか無性に叫びたくなってきた」
深夏「おい、ユウ。会長が涙目で睨んでるからやめたほうがいいぞ」
会長「な、泣いてないもん！とにかく!!パーソナリティは女の子の元気な会話を望んでいるのよ！」
真冬「は、はぁ……そうでしょうか」
会長「うん。男子リスナーなんてそんなもんだよ」
杉崎「こらこらこら！なんでリスナーを見下げた発言すんの!?生徒に喧嘩売ってんの

?!」

会長「パーソナリティあってのリスナーじゃない」

杉崎「リスナーあってのパーソナリティだ！」

深夏「おお、鍵が物凄く真っ当な発言してる！すげぇ！ラジオ効果すげぇ！」

会長「……そうね、私が間違ってたわ杉崎」

杉崎「分かればいいんですよ、分かれば……」

会長「そうよね。やっぱり、ある程度は媚びておいたほうがいいよね。そうすれば、男子リスナーなんてコロっと騙されちゃうし」

杉崎「アンタはなんもわかっちゃいねぇ!!そういう発言を堂々としちゃダメだって――――」

会長「お便りのコーナー！」

杉崎「無視!?ラジオなのに、言葉のキャッチボール拒否!?」

四季「だって会長先輩だし」

知弦「そうね。アカちゃんだものね。……ふふふっ、あのアカちゃんの初めての事でも精一杯頑張る姿……いいわ」

四季「それ今言う必要あります？」

知弦「ないわ」

四季「ですよね」
杉崎「なんでアンタらは普通に二人で話してんの!?知弦さんも写メなんて取ってないでもっと舵取りしてくださいよ！優も最初のテンション時みたくもっと積極的にだな――――」
四季＆知弦「……」
杉崎「ラジオで無言はやめましょうよ！」
会長「さーて、それでは一通目のお便り！」
深夏「これってたしか、突発的に放送してるんだよな……それなのにお便りがあんのか」
会長「全時空だからねっ！えーっと、『生徒会の皆さん、こんばっぱー！』はい、こんばっぱー！」
杉崎「誰一人俺の話聞いてねぇ!!進行重視か！それになにその挨拶！恒例なの!?」
女性陣『こんばっぱー！』
杉崎「俺たち以外の共通認識!?」
四季「こんばっぱー……？こんばんはをラジオ風に。おっはーみたく気軽に言えるようにアレンジしたもんなのか……？」
杉崎「お前は何冷静に考察してんだ！そんな深読みする必要ねーから！」

会長「『オールナイト全時空、いつも楽しく聞いております』ありがとー！」
杉崎「嘘だ！第一回放送のはずだこれは！」
四季「こんな学生がお送りするラジオ放送に楽しみを得ているのか……この投稿者はどれだけ人生に楽しみを感じていないんだろうか」
会長「はい、そこうっさい！これは全時空放送なのよ？時系列なんて些細な問題！」
杉崎「さすが全時空!!」
会長「あと、言い忘れたけど、一応コレ生でも放送されてるから。聞いてる人は少ないだろうから、また昼休みに構内で流すけど」
杉崎「そういうことは早く言ってくださいよ!!てかそれなら、もっと発言に気をつけてください！」
四季「マジか……どうりでさっきからメールが来まくるわけだ。……えーっと、取り敢えず『俺は悪くねぇ！悪いのは変態の方の副会長が悪いんです』……はい、一括送信っと」
真冬「そんな適当な返信でいいの…？」
杉崎「おい、深夏。止めなくていいのか？」
深夏「いや、どう考えてもお前のことだろ。変態副会長って」
会長「はいはい。続き読むわねー。『ところで皆さんに質問なのですが、皆さんはどん

な告白をされたら嬉しいでしょう？僕は今、恋をしているのですがどう告白すればわからず迷っています。くりねえ！是非アドバイスお願いしまっす!!』」

杉崎「くりねぇって呼ばれてるんだ！こんなにロリのくせに！」

四季「恋愛相談か……投稿者さんよ。相談相手間違ってないか？もっと恋愛に慣れて……いや、この言い方は良くないな。年上の頼れる人に聞いてみたほうがいいだろ」

会長「なら私の出番ね！年上の！頼れる!!この偉大な恋愛経験豊富な私に任せなさい!!」

杉崎「男と手を繋いだことさえないくせに…」

真冬「……何一つ当てはまってないような気がします」

深夏「一応年上ってのは当てはまってるけどな」

知弦「三人とも、もう少し声のボリュームを抑えなさない。アカちゃんに聞こえちゃうでしょ？」

会長「聞こえてるよっ!!!仮に私に聞こえなくても録音してるから後でわかるから!!」

四季「……で、恋愛経験（ＮＯＴ）豊富で頼れる（のは会長先輩の親友の先輩）会長さんの意見はどうなんです？」

会長「……なんかすごい含みのある言い方な気がするけど……まぁ、いいわ。さっさと告白しなさい！以上!!」

杉崎「なんかテキトーなアドバイスしたーーーーーーーー!!!」
知弦「そうね……好きにすればいいんじゃないかしら？私には関係ないし」
杉崎「パーソナリティがリスナーに冷てぇーーーーーーー!!!」
会長「真冬ちゃんはどう？」
真冬「え……そ、そうですね……真冬は……わかりません」
杉崎「まさかのわかりません発言キターーーーーー!!!」
会長「深夏は？」
深夏「当たって砕けろ！以上!!」
四季「砕けちゃダメだろ……これだけ人数がいるのにまともなアドバイスがないってどういうことなんですかねぇ……杉崎は？」
杉崎「お、俺？……懸垂しながら告白とかいいんじゃないか!?」
四季「会長先輩、次行っていいですよ」
杉崎「せめて触れてくれよ!!スルーが一番辛いわ!!!」
会長「んー、四季はどうなの？」
四季「え、俺ですか？」
深夏「そうだな。あたしたちのアドバイスをまともじゃないと言うくらいなんだ。素晴らしいアドバイスをしてくれるに違いないよな？」

真冬「ま、真冬もお兄ちゃんのアドバイス……気になります」
四季「露骨にハードル上げて来やがるな……このリスナーの意中の相手がどんな人なのによってアドバイスなんざ変わってくると思うんだが……まぁ、いいや。そうだなぁ……俺だったら放課後の屋上とかに呼び出したりして告るかね。ラブレターとかメールとかでの告白も有りかもしれないけど、やっぱこういうのって直接、面と向かって言われるのが良いもんじゃないの？あ、告白するならちゃんとタイミングを間違えんなよ？雰囲気ってのは重要だからな。ちゃんとはっきりと、自分の気持ちを伝えることを忘れずに。リスナーの恋が成就するのをひっそりと祈っているぞ」
「「「「……」」」」
四季「……？なんで皆黙りこくってんですか」
杉崎「い、いや……」
会長「まさかそんな真面目に回答するなんて思わなかったから……」
知弦「さすがユー君ね……恥ずかしがらずに言えるなんて」
深夏「……そうか、ユウは直接言われる方がいいのか……」
真冬「め、面と向かって……はぅ、そんなの真冬には難易度が高すぎ……」
四季「……取り敢えず次の便りでも読みますか。……コレか？『妹は預かった。返して欲しければ指定の口座に――――』いや、俺に妹はいないし。ったく、間違いメー

ルかよ」
杉崎「いやいやいや、お前宛じゃねーから!!」
会長「もうっ！進行者は私よ！そのメールは破棄しちゃっていいわよ」
杉崎「いいの!?今の内容そんな簡単にスルーしていいの？」
会長「それじゃ次！『生徒会の皆さんこんばっぱー』こんばっぱー！」
女性陣『こんばっぱー！』
杉崎「だから、なんでコレだけ皆ノるの!?いつ打ち合わせしたの!?」
四季「適応力が高いな皆」
会長「『くりねぇ。どうしよう。私、お金が早急に必要で……というのも、うちの妹が誘拐されちゃって、料金が金策に走り回っているんだけど、集まらなくて……どうしたらいいかなぁ』」
杉崎「ディープなお悩みキターーーーーー!!!」
四季「取り敢えず、こんなとこにメールする以前に警察にでも行けよ」
杉崎「ホントだよ!!つかこれ、間違いなくさっきのメールに関連してるよなコレ！」
会長「ううん……そうねぇ、分かった！ラジオネーム被害者の家族さんには杉崎のポケットマネーから、まとまったお金をプレゼント！待っててね！」
杉崎「えええええええ!?何勝手に俺が提供することにしちゃってるんですか!?プレゼ

ントに現金用意しちゃっていいわけないでしょ!!」
会長「いいじゃない。杉崎がお金出すだけで人一人の命が助かるのよ？安いもんじゃない」
杉崎「なんか急にまともな事を言いだしたーーーーーーー!!!!言ってることはまともだから反論しずれぇ！」
四季「いや、しろよ。お前が金出さずとも、警察に任せりゃいいことだろ」
会長「それじゃあ、ここで一曲！先日私が出したニューシングル。妹はもう帰ってこないを聴いていただきましょう」
杉崎「空気よめええええええええええええええええ!!!」

♪妹は帰ってこないフル再生＆一人熱唱中♪

四季「……歌いきった」
会長「良い歌声だったわよ四季。今聴いていただきましたのは絶賛発売中のシングル妹はもう帰ってこないでした。歌い手は我が生徒会の雑用係の四季優に努めていただきましたー」

杉崎「お前はなんでナチュラルに歌ってんだ……」
四季「会長先輩に言ってくれ。スケジュールの所に歌い手が俺になってたんだから」
知弦「なんか、普通に良い歌声でびっくりしたわ……ユー君歌うの得意なのね」
真冬「お、お兄ちゃん！今度はこのＯＰを歌って欲しいです！」
会長「はーい、真冬ちゃん？それはまた今度にしようねー。次は恒例のコーナー！椎名姉妹の、姉妹でユリユリ♪」
杉崎「……そ、それはちょっと聞きたいかも」
真冬「せ、先輩!?ちゃんとツッコンで下さいよそこは！」
深夏「そうだ！聞いてないぞそんなの!!」
四季「恒例なのかよ……幼馴染がどういう趣味持ってようと俺は気にしないが、身内の恥を晒すようなことはことはやめたほうがいいんじゃないのか……？」
深夏「おい！幼馴染のユウがそんなこと言ったらガチで捉われるだろ!!」
真冬「そ、そうだよ！ちゃんと否定してよ!!」
四季「いや、だって……普段のお前らを見ていても、完全に否定できないんだが……」
深夏「なんでだよ！アタシは鍵みたいな節操のない男が嫌いなだけであって、女が好きなんて一言も言ってねーだろ!!」
真冬「真冬だってノーマルです！たしかに真冬は杉崎先輩みたいな男の人はちょっと

苦手だけど、だからといってガチユリではないです!!」
知弦「二人ともそこまでにしなさいな。とばっちりを受けたキー君が部屋の隅で、体育座りして泣いているわよ」
会長「ちなみにこのコーナーはリスナーから送られてきた恥ずかしい百合っぽい脚本を、椎名姉妹が演じるという、人気コーナーです」
四季「人気なのか……つまり、人気になるほどの演技に熱が入って……」
深夏「だからなんでユリの方に捉えるんだよ!!アタシも真冬もノーマルだっての!!」
知弦「付け加えていうと、このコーナーを楽しみにしているのは男子生徒だけじゃなく、一部の女子生徒も楽しみにしているみたいよ」
真冬「聞きたくなかったですよそんな情報!!」
杉崎「……ここの生徒たちは俺を変態扱いする資格はないはずだ」
会長「あ、復活したんだ。変態呼ばわりされたくなかったら、まず普段の行いを改めようねー。さ、こんなコーナーさっさと終わらせよ。はい、椎名姉妹よろしくー。これ、台本」
真冬「う、うぅ……ホントにやるんですか？」
深夏「うわ、なんだこれ！こ、こんなの読んでられっかよ！」
四季「リスナーたちには声しかお届けできないから、俺が二人の状況を解説するとし

よう。会長先輩に台本を渡された椎名姉妹は渋々と受け取りながらも中身をしっかりと確認した。俺にはどんな内容が書かれているかわからないが、彼女たちが恥ずかしそうに頬を赤らめながらも、読み込む姿はさながら、思春期の女子が女性週刊誌のちょっと大人向けコーナーを読むようで――――」

深夏「なんで急に説明口調?そういう誤解を招くようなことを言うなって言ってんだよ!!しかもなげぇ上に生々しいんだよ!!」

杉崎「ナイスだ!優!!お前のお陰で、今の深夏と真冬ちゃんが色っぽく見えて……ゴクッ」

真冬「ひうっ!……杉崎先輩の見る目が怖いです……」

深夏「ええい!こんなのやってられるかってんだ!!」

会長「こら深夏!やらないで逃げるなんてダメよ!あなた副会長でしょう!」

知弦「副会長は嫌な事も投げ出さないで責務を果たすべき……そう言いたいのよね?」

会長「……そ、そうよ!これを乗り越えてこそ真の副会長に進化を遂げるのよ!!」

四季「今絶対先輩の言ったことなんて頭になかったですよね?」

杉崎「副会長関係ないでしょそれ……」

深夏「……やるしかねーようだな」
杉崎「なんで納得してんの!?」
四季「え……やるの？」
真冬「真冬も覚悟を決めました！」
杉崎「なにキッカケで!?」
四季「(……そういう軽率な行動がユリ疑惑に拍車を掛けていると思うんだが……今の二人に何言っても無駄だし放っておこ)」
知弦「ふ……それでこそ椎名姉妹よ」
杉崎「貴方はどうして変なとこだけ、思い出したように発言すんですか!!」
会長「それじゃ元気にいってみよー」

♪耽美なＢＧＭ（某鍵作品えくすたすい～）♪

『真冬……』
『んんっ……ダ、ダメだよお姉ちゃん。真冬たちは姉妹で…』
『かわいいな真冬は……ほら、口ではそう言っても体は……』

『あ……お姉ちゃん、そこは……っ！』

杉崎「待て待て待て待てーーーーー!!!個人的にはドキドキワクワクだけど、これ以上やったらこのＳＳ削除されちゃうでしょ!!」

会長「う、うん……そうね。こ、これはなんか、やりすぎたわ」

真冬「えええええ!?これだけやらせておいて！」

深夏「ひでぇ！そういう反応されると、アタシたち本格的にいたたまれねーじゃねーか！」

知弦「……椎名姉妹の絡みは放送コードに引っかかるわね……そういうディープなのはプライベートだけで留めてくれるかしら」

深夏「勘違いされるようなこと言うなよ！プライベートはこんなんじゃーねっての！ユウからもなんか言ってくれよ!!」

真冬「そ、そうです！リスナーの皆さん信じないでくださいっ！お、お兄ちゃんは信じてくれてるよね!?」

四季「……そうですね。ええ、椎名さんたちのことは信じていますよ（ユリだと言うことを）」
深夏「名字呼び!?こんなに近くにいるのにユウとの距離が遠く感じる!!」
真冬「絶対信じてないよね!?その目は真冬たちを疑ってかかってる目だよね!?」
知弦「大丈夫よ、ユー君。椎名姉妹は私達の手の届かない所にまで行ってしまったけれど……彼女たちはきっと幸せを掴んで、また戻ってくるわ」
四季「そうですね……信じていれば、いつかきっと……ユリマスターになって帰ってきますよね……」
椎名姉妹『もうやめてええええええええええ!!』
会長「え、えーっと……それでは一旦ＣＭはいりまーす！」
杉崎「ＣＭまであるんですか……」

しなくてもいいのにラジオ放送しちゃう生徒会2

会長「よし！気を取り直して次いくよー！」
深夏＆真冬「……」
杉崎「あの、会長？若干2名、回復してないみたいですけど」
会長「大丈夫。そのうち復活するわよ。というわけで次のコーナー。杉崎鍵の殴るなら俺を殴れ！」
会長「このコーナーは校内でもし誰かを殴りそうなほどカッとしてしまったら、取り敢えず、杉崎を標的にして発散しましょう。というコーナーです」
杉崎「俺の人権は!?」
杉崎「なんですかそのコーナー！」
四季「おー、なんかタイトルだけで胸が熱くなってくるな」
杉崎「そりゃお前に害はないからな!!こっちは震えが止まらないわ！」
知弦「武者震いで？」
杉崎「背筋がですよ!!」
四季「マジでか。それじゃ、杉崎。なんかその面ムカつくから軽く１００発殴らせて

くれ」
杉崎「１００発のどこが軽く!?そんな理由で殴らせるわけねーだろ！」
知弦「あら、それなら、この間新調したおニューの鞭があるのだけれど、試させてもらえないかしら？」
杉崎「いやいやいや！実験台にしようとしないでくださいよ!!」
四季「んじゃ、１００円もらってやるから１００回殴らせてくれや」
杉崎「なんでお前に払うことになってんだよ!!しかも、一発辺り１円換算!?俺の価値って駄菓子よりもないの!?」
知弦「はい、キー君。１００円上げるから１００発ね。ほら、そこに横になりなさいな」
四季「金は……後でもらうからいいか。そいじゃ、杉崎。歯を食いしばらなくていいし、目を瞑らないでいいぞ」
杉崎「ちょ……！か、会長！止めて下さい！この二人相手はやばいですって!!」
会長「そ、そうね……ほら、四季に知弦。そういうのは放送が終わってからにしなよ」
杉崎「なにさりげなく許可とってんですか!?」
知弦「……それもそうね。別にキー君でなくても、ユー君でもいいしね」
四季「良くないです。標的変えないで下さい」

会長「今にもむしゃくしゃして破壊衝動が収まらないそこのアナタ！このコーナーは３６５日２４時間年中無休で開催しておりますので、揉め事がありましたら２年Ｂ組の杉崎鍵までご連絡を――――」

杉崎「するなーーーーー!!!!」

会長「仕方ないわね……四季と知弦みたいな生徒がいても困るし、飛ばすとしますか」

四季「言っておきますけど会長先輩、さっきのは冗談ですからね」

知弦「そうよ。私がそう簡単に鞭を振るうわけないじゃない」

杉崎「……いや、四季はともかく知弦さんは本気だったような……なんで俺の担当だけこんなコーナーなんだ……」

深夏「……普段の行いだろ」

真冬「真冬たちのコーナーも相当酷いモノだと思います……」

会長「あ、椎名姉妹。案外早い復帰ね。次のコーナー行くよー。お次は四季優の頼るなら俺を頼れ！のコーナーです！」

四季「えぇ……もうタイトルからして嫌な予感しかしない」

杉崎「俺よか断然いいだろ!!ニュアンスは同じなのに、この差はなんだ!!」

女性陣『普段の行いの差』

杉崎「満場一致!?さっきの深夏の言葉よりもダメージが深いのは何故だ……！」

四季「……で？その心躍らないコーナーはなんなんですか？」
会長「テンションの下がり具合がやばいわね……このコーナーは碧陽学園でも数少ない常識人で先輩、後輩、同級生からも頼られている生徒会の雑務員の四季にお悩みごとも、悩めないことも相談しちゃいましょうというコーナーです」
深夏「なんか至って普通のコーナーだな」
杉崎「いや、悩めないなら相談する必要ないだろ……」
四季「頼られてるというか、面倒事を押し付けられてるだけなような……」
知弦「でも学籍問わず頼られてるのは事実よね。私のクラスでもユー君と話したいっていう女子は多いわよ」
真冬「ま、真冬のクラスでも紅葉先輩と同じです。……お兄ちゃんに憧れる子は多いです」
深夏「こいつのどこがいいんだろうなー。脳内本だらけの本の虫なのによ」
杉崎「ぬぐぐぐぐ！なぜだ！なんでこんなハーレム願望ないやつがモテて、ハーレム結成が夢の俺がモテないんだ……！」
会長「不誠実な杉崎と比較するまでもないでしょうが……それじゃお便り読むわねー」
四季「俺に拒否権なんてないでしょうし……お願いします」

会長「『読書が趣味な四季先輩にご質問です。四季先輩のオススメの本はなんなのでしょうか？よろしければ教えて下さい』」
四季「……これ、お悩み相談っていうよりも……」
深夏「ファンレターじゃねーの？」
会長「みたいねー。ま、気になって一日三食しか喉を通らないみたいだし、答えて上げたら？」
杉崎「一日三食は普通だろ……」
四季「うーん、俺のオススメねぇ……基本ノージャンルで読むからなぁ。あ、そうだ。オススメの本じゃないけど、俺が良く買いに行く本屋があるからそこ教えるか。えっと、場所はだな――――」
真冬「……これがステマってやつなのでしょうか」
会長「むむっ、四季ってば勝手に宣伝なんかしちゃって。放送が終わったら、宣伝費もらわないとね！」
杉崎「これくらいはいいでしょうに……」
四季「――――だ。メモは取ったか？まぁ、仮に忘れたりしたら気軽に訪ねてくれや」
知弦「さりげなく、リスナーと会おうとしてるわね」
深夏「これが鍵なら、下心しかないんだろうけど、ユウだからなぁ……」

杉崎「いやいや、深夏よ。俺にだってやましい気持ちだけで接するわけじゃねーって。ただ、ちょっと。ＬＩＮＥとか教えてくれないかなー……って」
深夏「それが下心だっつってんだよ！」
四季「……これで終わりですか、会長先輩？」
会長「ホントは後何十件もあるんだけど、時間もないし次行っちゃいましょうか。残りはプライベートでよろしくね」
四季「なんか余計な仕事が増えたんだが……」
杉崎「美少女との交流できるチャンスなんだぞ！嫌がるこたぁないだろ！」
四季「そもそも、相手はリスナーなんだし、美少女どころか性別までメール通りとは限らないだろうが」
会長「次は私のコーナーだよ！桜野くりむのファンレター！」
杉崎「明らかに差別してね!?会長と優だけ優遇されすぎてません!?」
四季「俺だけにってか？あんま面白くねーな」
杉崎「うるせーよ!!別に意図して言ったわけじゃねーわっ！」
深夏「そうだそうだ！もっとアタシらしさを全面に出すコーナーを要求する！」
知弦「深夏らしさを出した結果がレズ展開じゃないかしら」
深夏「ユリ思考が個性なんて嫌すぎる!!」

会長「私は生徒会長！故に、貴方達とは違う存在！神すら凌駕するのよ！」
杉崎「アンタは新世界の神にでもなったつもりか!!」
真冬「ということは、会長さんが卒業して生徒会長をやめたら……会長さんに残るものってなにかあるんでしょうか？」
四季「言ってやるな真冬よ。会長先輩は今の立場を守るために必死なんだから」
会長「……匿名さんからのお便り！」
知弦「アカちゃん、辛ければ私の胸の中で泣いてもいいのよ？」
会長「泣いてない！……コホン、『桜野くりむ様。一目見た時から貴方のことが頭のなかから離れず、四六時中貴方のことばかり考えております。よろしければ、一度僕と何処かに――――』」
杉崎「っておい！ファンレターじゃなくてラブレターだろコレ！誰だ！俺の女にちょっかい出すやつは！いい度胸だ！武器なんざ捨ててかかってこい!!俺が相手してyぶべらっ!!」
会長「何口走ってるのよ貴方は！」
杉崎「だ、だって俺の嫁にラブレターなんて送るやつがいるから……」
会長「私は杉崎の嫁じゃないから！彼女ですらないし！ラジオ放送なんだから、変なこと言わない!!」

杉崎「すいません。ついカッとなってやりました。後悔も反省もしていません」
会長「なんでそんなにふてぶてしいの!?」
杉崎「で、でも、その勘弁してください。会長への愛は俺だけが向けてればいいんです。他の男の愛を受けようとする会長の姿なんて、俺が嫉妬と怒りで耐えれそうにないんです」
四季「おい、なんでこっち見てんだ」
知弦「でも、そうね。私以外にアカちゃんに手を出そうとする輩がいるのは見過ごせないわね。アカちゃん？今すぐにアカちゃんに送られてきたファンレターを私に――――」
会長「しょうがないわね！そこまで言うなら次のコーナー行くわよ！」
真冬「あ、紅葉先輩一体何を言うつもりだったんでしょう……」
四季「いいか、真冬。世の中には知らないほうが幸せなこともあるんだ」
深夏「にしても、会長に一目惚れって……このリスナーひょっとして――――」
四季「無粋な勘ぐりは野暮だぞ深夏。……本人が幸せならそれでいいんだ」
会長「んー？そこの幼馴染トリオ何か言ったー？」
「「なんでもありません」」
会長「……まぁいいわ。どうせこの後再確認するし。はい、では次！学園５・７・５」

杉崎「急に普通の定番コーナーですね……」
四季「授業の一環でやりそうだよな」
会長「うん、ネタ切れだったし」
杉崎「言っちゃうんだ！」
会長「このコーナーはリスナーが考えた、この学園にまつわる面白おかしい５・７・５を紹介するコーナーです」
杉崎「逆に危機感を抱くほど、ありきたりなコーナーですね」
会長「ではここで一句！匿名希望さんからの５・７・５」

『燃え上がれ　激しく燃えろ　杉崎家』

会長「……す、素晴らしい詩ですね、情景が目に浮かぶようです」
杉崎「……」
会長「えっと……杉崎？私が言うのもなんだけど……ツッコまないの？」
杉崎「いえ、会長に俺のを突っ込みたいのは山々なんですが、リアルに身の危険を感じ――――」
深夏「生放送中にまで変態発言してんじゃねー!!」

杉崎「バルボロスッ!!」
知弦「良い危機察知能力ね。察知しただけじゃ何の意味もないけど」
真冬「真冬はバルボロスよりもグレイナル派です！」
四季「俺は竜神王派だな。……なんではくりゅうおう、リストラされちまったんだろうな」
会長「……少しでも杉崎を心配した私が馬鹿だったわ」
知弦「なんにせよ、キー君のこれは自業自得よね。皆の憧れの美少女達が集まるコミュニティに在籍しているだけでもアレなのに……あ、ユー君は別ね。キー君みたく攻略するだの、ハーレム宣言でもしてるわけじゃないし」
深夏「だな。これを機に少しは自重したらどうだ？」
杉崎「うぅ……すぐに手を出すのも自重してほしいんだが……」
四季＆深夏「「自業自得だろ」」
杉崎「ええい！俺は脅しにも拳にも負けん!!ここは俺のハーレムなんだ!!余計なのが一人いようが関係ねぇ!!文句あるやつ、喧嘩なら買うぜ！だから――――」
会長「だから？」
杉崎「火付けるのだけは勘弁してください。すいませんっした」

四季「よしわかった。家に火は付けないでやる。その代わりお前を今から火で炙らせろ」
会長「ほら、四季。土下座してる相手に追い討ちかけるのはやめなさいって。……えーっと、リスナーの皆も杉崎の家に放火はしないようにね」
知弦「そうね。他所のとこに燃え移っても困るものね」
杉崎「俺の心配はしてくれないんですか!?」
会長「それでは2枚めいくよ～。次も匿名希望みたい。こほん」

『金も無い　勢い余って　人さらい』

杉崎「犯人コイツかぁーーーーーーーーーーーーー!!!!!」
会長「え？なに？どういうこと？」
四季「さっきの破棄したメールに関してですよ。妹を預かった云々の」
真冬「住所とか名前とか書かれてないの？」
四季「……いや、書いてねーな。あ、追伸で2万も要求してやったぜ！……だとさ」
杉崎「やっす！うちの生徒の妹の身代金!!なんで両親用意できねーんだよ!!」
会長「うーん……世の中恵まれてない人もたくさんいるんだし、たまたまお金がな

かったかもしれないね」
杉崎「そ、そうですけど……なんかこの事件割りと浅い気がしてきました」
四季「そもそも、このラジオに連絡してる時点で察していたがな」
会長「では最後の５・７・５です……こほん」

『真面目にさ　仕事をしろよ　生徒会』

杉崎「一般生徒の素直な反応キタアアアアアアァァァ!!」
会長「まったく、失礼しちゃうわよね。こんなにも生徒のために働いているというのに（モソモソ）」
四季「会長先輩。今のうさマロを頬ばりながら喋ってる姿を全校生徒が見ても、誰も仕事しているとは思わんと思います」
杉崎「だよな……というか、今まで良く苦情とかこなかったと思うわ」
深夏「だな。あたしもそう思う」
真冬「真冬もです」
会長「なによ！やるべきことはちゃんとやってるわよ！」
知弦「やらなくていいことも大量にやってるけどね」

四季「むしろ、やらんでいいことの方の割合が圧倒的に高いですし」
会長「むぅーーっ！不愉快だわ！このコーナー終了！はい終わり!!」
杉崎「そういう態度が駄目なんですって！」
会長「さて……じゃぁ、終わりも近いことだし、フリートークしましょうか」
杉崎「今までも十分フリーダムすぎてましたけど……」
深夏「お、会長さん。メール来てるみたいだぜ」
会長「え？なになに？」
真冬「ええと、ですね……『妹が誘拐されていた件ですけど、無事解決しました』らしいです。よかったですね！」
杉崎「おぉ、解決したか。良かった良かった」
知弦「……ちっ」
杉崎「すげぇ聞こえてますけど。なんですか今の舌打ち」
知弦「気のせいじゃないかしら？」
杉崎「絶対気のせいじゃないですから！しかも録音&放送してるってのに！」
四季「さっき、誘拐されたっていうメールが来たのにずいぶん早く解決したんだな。どんな犯人だったのやら」
真冬「えっとね……よく分からないけど、最終的に攫われた妹さんが、自分で犯人を

叩きのめしたらしくて…その犯人さんは……今重体です」
杉崎「２万円欲しかっただけの犯人んんんンンンンンンン!!!」
四季「どんだけ凶暴な妹なんだ……」
真冬「妹さんも、基本的には犯人さんに遊んでもらっていただけのようですよ。でも……このラジオをたまたま聴いていて、自分が攫われていることに気づいて、犯人をボコボコに……」
杉崎「俺たちのせいかっ！」
深夏「結局なんで２万円欲しかったんだコイツは…」
真冬「えっと……メールによると……うん、なんか犯人は意識を失う前、この子の姉に貸したままの２万……返してほしかっただけなのに……と倒れたみたいです」
杉崎「いたたまれねーーー!!っていうか、諸悪の根源は姉か！リスナーか!!」
真冬「そのリスナーさんから送られてきたメールの最後は……悪は滅びるのよ！オーッホッホッホ！……で締めくくられています」
四季「小悪党丸出しのセリフだな」
杉崎「このラジオのリスナーはろくでもないな！」
四季「まぁ、理由はどうアレ犯人は人攫いを行ったわけだ。重体になるだけなら安いもんだろ」

深夏「何時になくドライだなー。あたしこの後犯人の様子でも見に行こうと――――」

四季「じゃあ聞くが、深夏は真冬が攫われて、無事帰ってきたとしても許せるのか？」

深夏「よし、あたしちょっと病院まで散歩に行ってくる」

杉崎「変わり身はやっ!!ちょ、ちょっと待てっ！重症の犯人になにするつもりだよ！」

深夏「んなもん決まってんだろ！真冬に手を出させないためにも、ちょっとぶち殺○すだけだよ」

杉崎「いや、この犯人が真冬ちゃんを攫う理由なんてないし！てか、P音おかしいだろ！隠すとこそこじゃなくね!?」

会長「えぇと……色々ありましたけど、このラジオも、そろそろお別れの時間が来たようです」

杉崎「おい優！ボサッとしてないでお前も深夏を止めるの手伝え！」

四季「あいよ。おい、深夏。別に犯人は真冬を攫ったりすることはねーぞ。犯人の趣向は病弱で、色白でゲーム好きで尚且つ廃人クラスの腕前でいて、身長も胸も小さい女の子が好みみてーだからな」

深夏「離せ鍵!!!アタシは真冬を守る義務があるんだ!!」

杉崎「オイイイィィィィ!!火に油を注げって誰が言った!?」

真冬「ちょっと待ってお姉ちゃんにお兄ちゃん！それ真冬を擁護してるように見えて傷つけているよ!?そ、それに真冬のむ、む、む、胸はそんなに小さくないもん!!」

知弦「そうね。真冬ちゃんの胸はアカちゃんよりも大きいものね」

会長「ちょっとおおおお！なんで私を引き合いに出すのよ!?もう！ほら、知弦！最後の締めくくりしてよ！」

知弦「しょうがないわね……では今日の知弦占い。当校の射手座の貴方。近日中に入院することになるでしょう。注意してください。ツインテールの女子を見かけたら全力で逃げなさい。ラッキーカラーは殺意の色。どす黒い色か、鮮血に染まった色か。その辺は各々のイメージに任せます。ラッキーアイテムは包帯。もしくは応急処置ができるようなアイテムなら代用できるでしょう。では最後に一言アドバイス……

死なないで

以上。知弦占いでした」
杉崎「犯人んんんん!!!全力で逃げてええええ!」
知弦「ではまた来週。この時間に会いましょう……会えるといいわね」
杉崎「犯人ンンンンンンンンンンン!!!!」

♪ＥＤ曲『犯人は白骨化していた』♪